

沖縄の民衆と差別

西里喜行氏に聞く(1)

今西 一 ●小樽商科大学名誉教授

石川亮太 ●立命館大学経営学部教授

天野尚樹 ●山形大学人文社会科学部准教授 編

本稿は歴史学者西里喜行氏のライフヒストリーについてのインタビュー記録である。インタビューは二〇一六年二月と一二月の二度に分けて琉球大学で行われ、本号掲載は第一回目の記録である。第二回目の記録は次号掲載を予定している。原稿はご本人はじめ発言者が校閲し、最低限の補筆を行ったが、発言の順序その他について大きな変更を加えたところはない。

西里喜行氏の経歴と主要著作について簡単に紹介しておく。西里氏は一九四〇年四月、沖縄県八重山郡の竹富島に生まれた。那覇高校を経て五九年、琉球政府の派遣により京都大学に「留学」し、文学部および大学院文学研究科の東洋史専攻に学んだ後、六九年に沖縄に戻った。那覇市史ついで沖縄県史の編纂に従事される一方、七〇年から琉球大学教育学部に勤務され、現在は同大名誉教授である。

西里氏の研究業績は大きく二つに分けることができる。一つは沖縄近代史研究である。これは先述のように、西里氏が那覇市史・沖縄県史の刊行に関わる形で職業研究者としてのキャリアを開始したことに関わる。この二つは戦後沖縄における初めての大規模な歴史編纂のプロジェクトであり、戦災で多くの史料が滅失した状況で、散在する基礎史料の収集にはじまる困

難な事業であったことが本インタビューでも言及されている。西里氏は二つの自治体史の近代篇を執筆したほか『論集・沖縄近代史』『沖縄近代史研究』（いずれも一九八一年）などの単著も刊行している。これらの著作の中で氏は、一八七九年の琉球処分後、明治政府のいわゆる「旧慣温存政策」について、日本資本主義の「本源的蓄積」を推進するための財源確保を目的とした収奪政策と位置づけた。このような評価をめぐって、日本史研究者の安良城盛昭氏との間で激しい論争の展開されたことが知られている（その内容について今西一「書評と紹介」安良城盛昭著『新・沖縄史論』・西里喜行著『沖縄近代史研究——旧慣温存期の諸問題』『日本史研究』二二三号、一九八一年）。

一方で一九八〇年代になると、西里氏の研究上の関心は、琉球処分を前後する時期の国際関係、なかんづく清朝との関係にシフトしていった。これが氏の研究のもう一つの核となり、その集大成である『清末中琉日関係史の研究』（二〇〇五年）は沖縄タイムス社から第三三回伊波普猷賞を授与されている。琉球王国は一七世紀以来、薩摩藩に従属する一方で清朝にも朝貢を続けていた。そのことが明治政府による琉球処分の過程を複雑にし、東アジアの国際秩序にお

ける一画期としたことを考えると、沖縄の近代史における中国ファクターの重要性は改めて言うまでもない。しかし西里氏以前には、清朝側の史料を積極的に用いてこの課題に接近する研究はほとんどなかったものであり、東洋史専攻の氏にしてはじめてなした貢献であろう。このように西里氏の研究は、琉球処分期の沖縄を対日関係に止まらない多国間関係の中に位置づける方向に発展したといえるが、氏の描くイメージは周辺諸国の絡み合う思惑のなかで沖縄が翻弄されたというものではない。むしろ琉球王国およびそこにアイデンティティを求める人々の主体性・能動性を認め、強調する点に氏の視角の特徴がある。琉球処分後、これに反発する清朝と明治政府の間で進められた琉球分割交渉が最終的に挫折したことについて、中国に潜入した琉球人による犠牲的な工作の成果であったとする主張は（上掲書参照）、そうした氏の視角を象徴的に示している。

さて本インタビューは西里氏にライフヒストリーを自由に語っていただく形で進められたが、時間的な制約もあり、出生・幼少時から一九七〇年の琉球大学着任の前後までを中心として、概ね時系列的にお話いただいていたのが本号掲載の一回目のインタビューである。次号掲

載の二回目のインタビューでは前回の補足とともに、これまでの研究テーマについて現時点でどのように考えているかもお話いただいている。幼少時の竹富島での戦争体験、アメリカ施政下の那覇での高校生活と京都大学への「留学」、出会った学友や参加した政治運動などについて詳細に語っていただいており、戦後沖縄の知的エリートがどのような経験と出会いを通じて思想形成していったかを考える上で、貴重な証言となったのではないかと考える。一方で琉球大学の教員として活躍された時期についての聞き取りに十分な時間を取れなかったことは残念だが、これについては後に譲りたい。

最後に、筆者（石川）の個人的感想であることをお断りしつつ、インタビューを通じて印象に残ったことを二つほど記しておきたい。

一つは学生時代、「祖国復帰」運動への参加である。ほぼ六〇年代いっぱいを学窓にあつた西里氏が政治運動に接触したこと自体は不自然でなかったのかもしれないが、西里氏によれば運動に加わる学生の間でも沖縄への関心は高いとはいえず、孤独すら覚える毎日だったようである。アメリカ施政下の沖縄からパスポートを携帯しての渡航という不安定な身分に置かれながら、どのようにして「祖国復帰」運動に関与

するに至ったか、もっと詳しくお聞きしておけばよかったという気もする。

そしてそのような運動の経験が、その後の西里氏の研究に大きな影響を与えたことも想像しやすいであろう。先述のように西里氏の沖縄近代史研究では、明治政府の「旧慣温存」政策への評価が一つの大きな軸となっている。この論点は、琉球処分は日本の「民族統一」の一環と言えるのか、言えると思えばどのような意味においてなのかという、当時盛んに論じられたより大きなテーマに連なっており（前掲の今西書評参照）、そのさらに背後にはアメリカ施政下に置かれた沖縄とその「祖国復帰」をどう考えるかという同時代的な問題意識があつたはずである。

もう一つは故郷竹富島への強い思いと、その故郷が沖縄の中でも辺境として位置づけられてきたことへの悲しみである。西里氏は高校進学のため那覇に住まいを移した際、ことばの違い等をとらえて差別されたことの口惜しさを繰り返して述べている。氏の研究では沖縄内部の差別の問題についても早くから論及されているが、こうした幼少期からの経験が重層的なものの見方を養ったことは間違いないだろう。先に氏の研究では琉球の主体性・能動性が強調されてい

ることを紹介したが、その琉球イメージが決して均質で境界のくつきりしたものではないことに注意したい。その点について、現在の西里氏がどのように考えているのか、これについてもさらに深くお聞きする機会があればと思っています。

※本インタビューおよびその整理作業は科研費補助金「帝国日本の移動と動員」(課題番号二五二四四〇三〇、研究代表今西

一)の一環として行われた。長時間のインタビューに応じてくださった西里喜行氏、全面的にご協力くださった大浜郁子氏(琉球大学人文社会学部准教授)に厚くお礼申し上げます。(石川亮太)

一 竹富島の少年時代

(一) 戦時下の生活

今西 いいですか。

じゃあ、どうも、今日はご無理をお願いしまして、西里先生にいろいろ、こちらからインタビューをさせていただいて、今までの研究のことをお伺いしたいと思います。

先生は沖縄の近代史の第一人者なんですけれ

ども、まずお生まれからお伺いしたいんです。お生まれは四〇年の四月一二日、竹富島^①でしたね。少年時代の生活というのは、どういう感じですか。竹富島、島の生活というのは。

すね。その出身で、いつごろ竹富島に移ったのかは、あまり詳しくは知りませんが、結婚したのは昭和の初めごろですから、そのころのことだろうと思いますけどね。

今西 ええ、私、行きましたけれども。

今西 西里 ぎょうだいはね、男子が三名、女子が三名で六名きょうだいで。僕は五番目の次男。

今西 ああ、行きましたか？

今西 西里 子ども時代の生活というのは、海に泳ぎに行ったり、全く自然な生活ですか。

今西 はい、行ったことがありますよ。
西里 周囲十キロ足らず、正確には八、九キロぐらいの小さな島ですけども、私はそこで中学校の三年の一学期まで生活しておりました。

西里 そうですね。僕が生まれたのは一九四〇年、いわゆる紀元二六〇〇年^②ですね。だから、戦争が終わった時には五歳、五つでしたけれども、この時期から竹富島の生活は記憶の中にありますね。小学校が六年まで、中学校が三年の一学期まで、竹富島で生活していましたから、島の人口が一番多い時期で、それこそ食糧難で食べられるものは何でも調達するという時期でした。ですから、食べ物求めて海へ行ったり、山へ行ったり、といつても、いわゆる山はないので、小高い藪や原野に分け入っているような野生の動物や植物をかき集めて、何とか生きながらえるという状態でした。主として海が食料の調達源でしたね。海で魚を捕ってきて食べるという生活でしたね。

今西 お父さんはどういうご職業だったんですか。

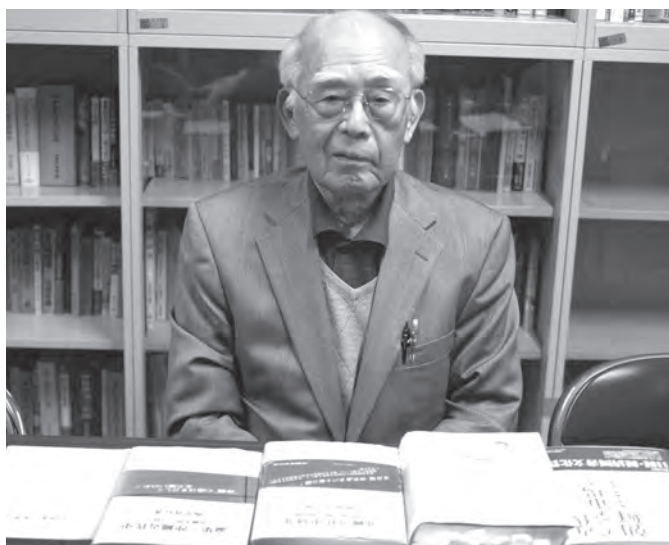
今西 西里 私のほうの家は漁業でして、父はいわゆる漁民なんですよ。竹富島からちよつと北のほうの宮古群島の一つである多良間島^③という所から八重山^④の竹富島に移って来たわけです。私たちきょうだいは皆、竹富島で生まれました。

今西 お母さんはどこのご出身だったんですか。

今西 西里 母は八重山の白保、今は石垣市の一部で

今西 母は八重山の白保、今は石垣市の一部で

今西 やっぱり竹富にも米軍は来たんですか。



にしざと・きこう◎琉球大学名誉教授。1940年生まれ。1969年、京都大学大学院文学研究科博士課程（東洋史学専攻）単位取得満期退学。2004年、京都大学博士（文学）。沖縄近代史、中琉日関係史。『琉球救国請願書集成』（法政大学沖縄文化研究所、1992年）、『清末中琉日関係史の研究』（京都大学学術出版会、2005年）ほか編著書多数。第33回伊波普猷賞（沖縄タイムス社、2005年）、第35回東恩納寛惇賞（琉球新報社、2017年）受賞。

西里 米軍、直接は来ませんでした。ただ空襲は激しくてね、僕の戦時体験というのは、一九四五年の前半、空襲で学校も爆撃されて崩壊したということもあったわけですけども、僕らはみんな茅葺の家に住んでいましたからね。

今西 ああ、そうですね。

西里 茅葺の家をカムフラージュするために、アダンとかさまざまな雑草を切り取ってきて、家の屋根の上に据え付けるんですよ。それで何

とかカムフラージュして爆撃を避けることができると思っていたわけ。

カムフラージュが効果なくて、いよいよ集落が爆撃されるというような緊迫した状況の中で、どこに逃げたかというところ、集落からかなり離れた海岸近くにあるガマ、自然洞窟ですよ。

家族でそこに避難して、そこでどのくらいの期間生活したのか、記憶ははっきりしないけれども、一週間くらいだったかな。石灰岩のガマの中は雫が滴り落ちるので、不快感がありましたが、そこで何とか生き延びたわけ。

食べ物なんかの調達も、やっぱり子どもは子どもなりに貢献しながらいかにということもありまして、いろいろな野草、ゼンマイなんかをよく採ってきて、料理しました。それが、たぶん僕の印象では一週間ぐらいだったような気がします。

もちろん戦時中は、

それぞれの家庭に防空壕があつて、私の家も庭にかなり大きな防空壕を造つていて、そこに逃げ込んだという経験も何回かあるんですけども、この防空壕についていうのは、雨が降ったら全部水浸しになりますので全く使い物にならない、ということもあつて、ずっとガマに逃げていたんだと思います。ヤンガーという大きなガマで、私たちの家族だけではなくて、集落の何家族かが一緒に移動して共同生活をしていたね。ほかのガマにも移動した家族があつたと思う。当時、竹富島を空襲したのはイギリス軍人ですよ。イギリス軍の爆撃機が、あれは何と言つたかな。グラマンじゃなくて。

今西 グラマンはアメリカですね。

西里 なんかいギリスの飛行機が一機撃墜されたことがあるんですよ。それで捕虜となつたイギリス人が集落へ連行されて来て。軍隊、駐屯してましたからね、竹富島にも。大石隊という軍隊が駐屯していたんですよ。その隊長の宿泊所に連れて来られて、その青い目の外国人はいろいろ尋問された後、石垣島、司令部は石垣島にありましたから、その石垣島に送られるということがあつて、大騒ぎしたという経験があるんですけどね。

その捕虜となつた兵士がどうなつたかという

ことは分からないんですね。もう、あのころ、ほかにも石垣島事件^⑩という有名な捕虜虐殺事件というのがあったので、それに関わっているのかなという気もするんだけど、そこらは全然分からないです。

今西 島の中で戦死者は出たんですか。

西里 島の中で戦闘はなかったけれども、空襲でやられた人はいる。僕の父も軍命で漁業中のところ、空襲を受けて瀕死の状態で担架に乗せて家の庭に運ばれて来たが、まもなく息を引き取った。僕の五歳の時だけど、その場面は鮮明に記憶していますね。

今西 沖縄の場合は沖縄戦の終わりですから、ちよつと敗戦が早いわけですね。

西里 ちよつと早い、六月時点のこと。^⑪

今西 六月だったんであれですけども。

西里 まだ沖縄戦が終わる前のことなんです。その後も、しばらく半年、一年ぐらいまで、軍隊ずつと駐屯し続けていたんですよ。

今西 そんなに駐屯していたんですか。

西里 はい、そうです。ほんで年明けてから引き揚げたわけ。

今西 ああ、そうですか。四六年になつてから引き揚げたんですか。

西里 うん、四六年初めごろまでには引き揚げ

たと思います。

今西 戦後の食糧難ですよ。

西里 そうそう。

今西 すごい大変だったんでしょう。

西里 すごい食糧難で、だから耕せるところは全部耕した。もともと竹富島というのは、石ガンバラという、石灰岩の石ころだらけの島なんです。耕作には全くというか、ほとんど適さない所で、もちろん水田はないですから、米作のために出作つていうのか、要するに島を離れて。

今西 よその島に。

西里 西表島のそばにある由布島つていう所、そこへ行って、そこに生活の拠点を置きながら、対岸の西表島へ渡つて水田耕作をして、収穫した米を持ち帰るといわけ。僕の長兄などは一七、八歳でしたかね、あの当時。一〇代の後半で西表島へ渡つて水田所有者に雇われて稲作に従事し、収穫した米の一部を賃金として受け取り持ち帰るといふ仕組みでした。竹富島では粟が主な農作物でしたから、粟、麦、ごま、豆など、すべて自分で生産したので、一通りの農作業は経験しましたが。

今西 主食は、じゃあ、ご飯にやつぱり雑穀とかそういうものですか。

西里 いや、芋ですよ。

今西 芋ですか。

西里 主食は、芋つていうのが、ほとんどの家庭の日常食で、芋は日々の生活に欠かせない重要な必需品となっていた。三、四月月に一回、収穫できるというのも、有り難かつたね。

今西 そうですね。土地が悪くても作れますしね。

西里 そうそう。だから芋の植え付け、芋掘りというのは僕らもいつも手伝っていた。芋は収穫したらすぐ食べられるので、まだ収穫の時期でもないのに、掘り出して焼き芋にして食べることもあったね。芋の葉っぱもおつゆにしたらだけじゃなしに、豚の餌にするんですよ。だから豚を飼うためにも重要。それから山羊の飼料の一部にもなる。山羊の食べる草を刈り集めるのは、小中学生の仕事でして、どの家庭でも山羊の草刈は日課でした。学校から帰ったら、すぐ集落から離れた原野などに出かけて、山羊の草を刈り集めて来るというのが僕らの日課になっていました。

その外、飲料水というのは集落内の特定の場所にある井戸に頼っていた。井戸はあちこちにあるんです。僕の隣の家の敷地内にも井戸が一つあって、僕なんかは隣の家の井戸を使わせ

てもらって、そこから水を汲み上げてバケツで運んで来るというのも一つの日課。

今西 水は貴重だったんでしょう？

西里 貴重です。だから干ばつ・日照りの時なんかは、集落内のほとんどの井戸の水がみんな乾し上がってしまつて、集落の中心にあった仲筋井戸、ナージカーと言っていました。そこには絶えず湧き水が出ていたこともあつて、そこまで水を汲みに行くわけ。

今西 島同士でも米の採れる島とか水の豊富な島とか、それぞれ生活に差があるわけですね。

西里 そうそう。

今西 で、島々の間で、自分たちは上位に住んでいるというような意識は、やっぱりあつたわけですか。

西里 いやいや、そんなことはない。大人の意識はどうだったか知らないけど。子どものほうの意識としては。竹富島のことしか知らないような状況ですから。目の前に他の島々は見えないだけども行つたことがない。八重山の主島、石垣島、目の前の石垣だつて別世界ですから、向こうは別世界というような感じで。

今西 石垣は文明でしょうね、それは。

西里 年に一回でも行くことができたなら、幸運なチャンスということだね。

今西 それで、全然交流はなかったんですか。年に一回というのはどういう機会に行かれるわけですか。

西里 だから、博覧会というのがあつて、博覧会に絵画の作品を出品したときに、特別優待というかたちで船に乗ってもらつて行つて見て帰るというぐらいですよ。それが、小学校の高学年、中学校に入つて以降は、修学旅行とか遠足ということで石垣に渡る機会がだんだん増えてくるということになったんだけど、その頃になると、もう石垣との差を痛感させられるということがありますよね。

今西 そうでしょうね。

(二) 小学校時代

今西 小学校の教育というのはどうだったんですか。入られて、やっぱり戦後の民主教育みたいなのがあつたんでしょうか。

西里 そうそう。僕たちは、いわゆる墨塗りというのは経験していない。

今西 ああ、そうですね。ちよつと前ですよ。

西里 いや、墨塗りというよりも教科書自体がなかったのかな。あるいは、ガリ版刷りの教科書だったかも。僕が入学したのは一九四七年か一九四八年。一九四七年だったかな。戦後間も

なくですけどもね、あのころはクラス八〇人ぐらいでしたよ。

今西 ああ、やはり多いですね。

西里 学校の校舎も限られていますから、どうしてもクラス八〇人くらいで、生徒数も一番多い時期でしたからね。だから、廊下にもずらつと机を並べて授業を受けるという状況だったんですけれども。

内容は、これはもう何です。やっぱり新しい状況に対応した教科書を使っていたような気がします。

今西 民主主義とか、そういう教育内容ですね。

西里 そうそう。それで、日本国憲法がつくられたということを先生方から知らされたというのは一年、二年だったかな。三年だったかな。

低学年の時期ですよ。で、これから日本が新しい国になると、そういう希望みたいな、それがかなり先生方のほうにも強くあつたように思うんですが、ただ、やっぱり古い考え方の先生も一緒にやっていますから、戦争以前の軍事教練的なスパルタ教育みたいなもので締め付けるといふ先生もいたにはいた。

今西 その先生というのは、どういった方が多かったんですか。本州から来るんですか。

西里 いやいや、戦前から赴任していた先生方

が中心ですね。台湾からの引き揚げというの、かなりあって、特に戦前、竹富島から台湾へ出稼ぎに出る人や台湾へ移住する人が多かったの¹²で、戦後に皆、島へ帰ってきたものだから、人口もあつという間に二倍、三倍に膨れ上がって、二〇三〇〇〇人くらい¹³の人口を擁する島になつちやつた。

だから先生方の中には、臨時教員として新たに赴任して来た先生もいて、若い先生もおられたし、あるいは新制の高等学校を卒業して、すぐ臨時教員として配属された方もおられた。で、その先生方は、生徒の僕らと一緒に、生徒を教えながら、自ら大学受験の勉強をするというふうなことがありました。

今西 その印象に残ったこととありますか。

小学校時代について何か。

西里 小学校時代では、そうですね、印象に残ったという事で言えば、あのころには竹富には電気がないんですよ、もちろん。電気はない上に、交通手段としても、少し十数名の人を運べるものとしたら牛車しかないんですよ。みんな、裸足で歩くしかないというふうな生活でしたが、そこへ、同級生の一人が自転車を持ち込んで走り回るといふ大事件があり、自転車¹⁴が文明の象徴として脚光を浴びましたね。だけど、

二輪車の自転車¹⁵がどうして倒れずに走り回れるのかということが僕には非常に不思議で、そのわけを知りたいという思いが非常に強くなつたという記憶がありますね。

それからもう一つ。あのころ、そうですね、何年くらいたつてからですかね、群島知事選挙¹⁶というのがありまして、八重山は八重山で八重山郡の群島知事を選挙するというふうな時期があつた。¹⁴これは沖縄全体の中央政府が、琉球政府¹⁵が成立する前の話ですけど、その時に候補者が竹富島に来て演説することになった。夕食が済んだ後、小学校の校庭で演説することになった。演説会場に発電機を持ち込んで、沢山の豆電球を吊して、もちろん発電機で灯すわけだけれども。

今西 手回しのやつですよ。

西里 うん。その電灯の下で、候補者が熱弁をふるっていたのが印象的でした。そんなことが何回かあつて、後に沖縄の戦後史で有名になる安里積千代¹⁶という方が、戦後台湾から引き揚げて来た弁護士でしたが、小学校の校庭で大衆を前にして熱弁をふるっているところ¹⁷が非常に印象的で、何を言っているのかよくは分からなかったけれども、こつちまで、子どもたちまで興奮しましたね。あの頃から、八重山も含

めて沖縄が今という方向に動いているのかというところが、うすうす子どもの僕らにも分かる時期やつたと思います。あの選挙では、安里さんが知事に当選されたわけですが。

(三) 中学校の生活

今西 中学校は竹富だったわけですね。そこに行かれたわけですね。

西里 ええ、私たちが入る前の年に分離したんですよ、小学校から。

今西 そこにできたんですか。

西里 新しく中学校をつくらなければどうしようもないということで、できたところが、いわゆる原野を切り開いて整地して造つたところなんです。一年一学級で三学年だから三つの教室をつくつて、そのほかに教員室とかいうのができた。運動場はまだできてない状況ですから、僕らもみんな動員されて、運動場予定地の石を全部削るんです。

今西 ああ、学校づくりながら行つたわけですね。

西里 校舎を建てるという作業と同時に、運動場をつくり直していくという作業を、暑い中で繰り返したという記憶があるんですが。そういうことがあつて、二年生の時からは一応、運動

場として使えるような状況になったということですね。

今西 その時は一クラス何人くらいだったんですか、だいたい。

西里 中学校のころは生徒数はやや減ったけれども、やっぱり五十、六十人くらいはおりましたよね。

今西 もう教科書は整備されていたんですか。

西里 そうです。あのあたりからは、もう教科書が。それで、中学に入ったところからは、いわゆる大和（ヤマト）の教育がどうなっているかということが、教員たちにとっても大きな関心事で、これも標準語教育というのが行われて、今度はまた強制されるような状況になっていくんですけどね。

僕なんか、竹富島で竹富島の言葉、テードンム二というんですが、それを日常会話などを使うことがあったけども、学校の授業では普通の日本語。授業時間に「しえんしえい」じゃなくて「せんせい」なんだと何回も厳しく指導されたことがある。その当時、国語の先生だったのは前新透先生¹⁷、あの『竹富方言辞典』という分厚い本を出された先生です。

前新先生は在職中、共通語、いわゆる標準語を殊の外、大事にするという先生だったんだけど、

ど、定年退職後は竹富島の言葉をそのまま使う、残すということが重要だということに気付いたということとで、三〇年にわたり古老を尋ねて語彙を収集して、『竹富方言辞典』という大著を出版されたわけですね。

今西 やっぱりその先生たちでも、文明化とか、本土と合わせていくという教育方針だったわけですか。

西里 そうです。理想は北にあるという思いです。それから、あのころから、いわゆる国費・自費制度¹⁸という制度があつて、沖縄、琉球全体で学生を選抜して、本土の各大学に毎年何人かずつ配置、配属させるという国費制、それから自費制¹⁹というのと同じような制度なんですけれども、費用は自分もちだとかたちの国費と自費の制度があつて、若い志のある青年たちは、だいたいまず国費・自費を目指すことになる。それと対抗するようになかたちで、米国、アメリカ留学、米留制度があつた。

今西 ああ、アメリカ留学ですね。

西里 日留と米留というかたちでの方向が、かなり定着してくるということになるわけですが、れども。

二 那覇での生活

(一) 高校進学

今西 先生、高校は、だけど八重山のほうの石垣へ行かれたんですね。

西里 いや、高校はね、僕は八重山をすつ飛ばしたんですよ（笑）。本来だったら石垣にある、高校は石垣にしかないから石垣に行つて高校に入るとするのが普通のルートなんだけど、僕のところは経済力がないもんだから、自分でお金を出して入ることができないし、まあ幸いと言いますか、上の兄や姉たちが、沖縄に行つていたので、彼らを頼らざるを得ない。そこで、中学校三年の一学期、二学期に入る前に、夏休みには石垣を飛び越えて那覇に行つたんですよ。

今西 高校は那覇高校¹⁹で。

西里 そうそう。まずは那覇中学校に入つて、それから那覇高校に受験して入つたというルートですね。

今西 そのころの、小学校でも中学校でも高校でもそうですが、読書なんかの思い出とかあります？ 好きな本だとか。

西里 中学校の時期にはあまり本はなかったけ

ど、図書館にある本を読んだわけ。僕はこういうわけか空を見上げるのが好きで、夜になるといつも星空ばかり見ていた。

今西 まあ、きれいでしょね(笑)。

西里 星座関係の書物をよく読み漁ったという時期があるんですけどね。あのころは、だから天文学という学問があるということは後から分かったんだけど、その星空を研究する研究者になりたいと思って。

今西 天文学者になりましたかった。

西里 そうそう(笑)。そういうふうにしていただけど。

今西 高校時代、一番好きだった教科は何ですか。

西里 高校時代は、僕にとってはあまりいい思い出はなくてね。那覇高校に入っただけでも、兄貴がコザにいたんですよ。コザって言うのは、今の沖縄市です。そこで米人相手の洋服店を経営していたものだから、僕は高校時代の半分くらいはコザから那覇までバス通学なんです。ただ、バスで通学するには相当の負担があった、まずは金銭的なバス代の問題もあるし、時間の問題がね。だから僕はほとんど毎日遅刻しているという状況で、一時間目に間に合わせるということが大変だったという記憶があります

ね。

今西 だけど、退職の時に出された四〇年史²⁰を読んでみると、このころ歴史物語に非常に関心があったという。

西里 そうそう。高校に入ってから歴史というものに非常に関心を持つようになったんだけど、そのきっかけというのは、やっぱり沖縄の現実だと思います。沖縄が、いわゆる政治的に覚醒する時代ですからね。

(二) 瀬長亀次郎と島ぐるみ闘争

今西 瀬長さんの事件が起こったころですね。

西里 そうそう。高校入ったのが一九五六年の四月です。ちょうど、そのころでしたかね。瀬長亀次郎²¹という後の沖縄の有名な政治家ですが、彼が獄中から。

今西 ええ、出獄した時ですね。

西里 出獄してきました。

今西 そうですね。ちょうど島ぐるみ闘争²²で。

西里 そうそう。だから、あのあたりから、非常に現実に関心になってきたということがあって、その演説は毎回聞きにいらしたね。

今西 ああ、そうですね。瀬長さんは、ただ市長職を剥奪²³されるわけでしょうか？

西里 そうそう。しかし、それは一九五七年。

僕らが高校二年の時でしたからね。土地闘争²⁴の年、一九五六年というのは、私はどういうわけか文芸クラブに入っていた。文芸クラブで、何もほとんど書いてはいないんだけど、むしろ機関誌を出すための広告集めをしたということですが。だけど、高校へ入った年の夏休み直前でしたかね。自分の通学している那覇高の校庭で十万人集会という、いわゆる四原則貫徹²⁵十万人集会というのが開催された。そこにも僕、参加したんですよ。会場の真前で、最前列で弁士たちの演説を聴いていたということが非常に印象に残っていますね。

あのころから、弁士が言っていることの七、八割は理解できるようになっていたから、賛同するときには拍手をしたりということはありましたけれども、同じ文芸部員で、そういう集会に断固反対だという人がいて、当時の文芸部長だが、演台に駆け上がっていつて日本復帰反対論をブチ始めた。で、彼を大衆がひきずり下すという事件が起こったんですけど、それをめぐって、また文芸部員の中でさまざまな議論が展開、激論が交わされるというふうな状況もありましたけどね。

で、その後、島ぐるみ闘争²⁶というかたちで、那覇だけでなく各地で集会があった。で、

僕ら文芸部員の有志は土地を強制接収²⁶された人たちが、いわゆる収容所みたいな所で生活していたものだから、そこへ行っているいろいろ聞き取りをして、それを文芸誌で報告するという試みをやったこともありますけれど。そのあたりから、かなり状況に対する敏感な反応というのが、それは私だけじゃなくて同世代の高校生全員に共有されていたと思いますね。

今西 当時も、まだあれですか、その戦後のそういう米軍によって接収されて、土地を追い出されて、収容所暮らしをしていて、そこに基地をつくられるというような状況は、まだ続いていたんですか。

西里 だから、基地を造るために皆、追い出されて、追い出された人たちが集まって一つの集落のようなものをつくっているという状況だったわけですよ。それを支援する運動というかたちで、いろんなイベントが行われたということもあつたんですけども、そういう経験というのが、高校生たちにもかなり共有されていたということだと思うんですね。

今西 瀬長さんの人気は、やっぱりすごかったですか。

西里 あの人はずごかったですよ。だから、あのころはもうほんとに、われわれには、あまり

娯楽っていうものもないし、ある意味で演説会というのは、なんかそういう娯楽的な部分もあったかも知らんけれども、演説会に駆けつけて、弁士の演説を聴くと。

だから、あのころの写真を見ても、だいたい前列に居るのは高校生ですよ。学生帽をかぶった高校生がね。けれども、他方ではやっぱり、そういう政治運動に参加するということに対する警戒感みたいなのがあつて、そんなことをやっていたらヤマトに行けなくなるぞという脅しみたいな圧力が掛かってくるということもある。

で、学校の中に、アメリカ軍が発行した宣伝パンフみたいな『守礼の光』²⁷とかがあつて、それには瀬長亀次郎が大ダコになつて、あちこちにタコの手足を伸ばしているというふうな類いのイラストなどを使った共産主義の浸透という宣伝の絵図が描かれていて、校内にばらまかれてあつたね。だから、あまり公然とは演説会に参加できないという雰囲気もあつたわけ。

今西 沖縄人民党²⁸はもちろん弾圧されて、非法ですか。

西里 そうそう。非合法というか、瀬長亀次郎が出獄する前までは、非合法だったかどうか分からんけども、沖縄人民党というのは。

今西 かなり米軍の活動制圧があつたでしょう。

西里 ええ。

今西 もちろんマルクス主義は駄目なんで。

西里 そうそう。

今西 当時は。

西里 メーデーもマルクスの誕生日だと言って。大衆運動にかなり過敏に反応していたね。そういう中で、高校生でも沖縄の現実に危機意識みたいなのが広がっていたというわけですね。
今西 高校生の組織というのはあつたんですか。本州で言ったら、(日本)民主青年同盟とか、ああいうのが。

西里 当時はそんな組織はなかったような気がするんですけどね。あつたかも知らんけど、僕の周辺ではそういうのは何もなかったですよ。それこそ、個々人が自分の判断で、これ。だから一緒に集会に行こうという話にはならない。演説会場で、「ああ、おまえも来ていたのか」というふうな感じでしたね。

今西 ただ、当時の生活はあれでしょう、通貨の切り替えなんか、六回も七回も通貨の切り替え²⁹やったり、ハイパーインフレーション³⁰になったり、割と大変だったんでしょう。

西里 うーん、そうですね。僕の記憶でもB円³⁰が長かったですかね。B円から、どういうふうに替わったのかな。またドルに替わって、ド

ルから日本円と。

今西 ええ、円という流れですね。

西里 そういう記憶はあるんだけど。あまり、しかし貨幣で困ったというような記憶はないですね。

今西 それほど金がなかった。

西里 なかったということなのかな(笑)。

今西 そもそもお金がなかった(笑)。

三 京都大学への進学

(一) 歴史学との出会い

今西 それで、国費留学で京都大学に行かれる。

西里 そうそう。国費・自費制度というのを利用して。

今西 六〇年に。

西里 いや、一九五九年ですね。

今西 五九年ですか。

西里 あのところ土地闘争が切り崩されて、何て言うんですか、五九年だから運動がちよつと下火になっていく時期ですよ。

今西 京大行く理由というのは何かあったんですか。京大を選んだ。

西里 それはね、世界史を担当していた恩師の、

高校の先生が、京都には日本の有名で錚々たる歴史学者が集まっているから、そこがいいだろうと。

その恩師に、歴史への関心をかき立てられたのは、高校の二年生の時でした。土地闘争の最中、那覇高校での十万人集会が開催された年の翌年ですけども、東恩納寛惇³¹という沖縄出身の大学教授が東京におられて、その方をわざわざ招請して、生徒たちに校庭で講演をしてもらったわけ。東恩納先生のお話というのは、全部はとも理解できなかったんだけど、要するに沖縄にも海外との貿易で繁栄した、輝かしい時代があったんだというような話で、世界へ雄飛せよということなんです。

それで、かなり刺激されたというような面もありますけれども、やっぱり現状を何とか、沖縄の現状を何とか打開しなきゃいかんという思いが強くなっている、何を手掛かりにすればいいのか、そのきっかけをつかみなかったということがある。だから、歴史を勉強すれば、そこに何か鍵が見つかりそうだというふうな、非常にいい期待にすぎなかったんだけど。

それで歴史を勉強したいと。それにもう一つ、沖縄では依然として閉塞状況が続いていて息苦しい。沖縄の中には息

苦しくてしょうがない。どこか外の世界に脱出したいという脱出願望みたいなものが一方にあつて、その時には既に琉球大学³²はできていたんだけど、琉球大学ではなくて、ヤマトに行ってみようという期待ですね。それが、歴史学を勉強したいという思いと結びついて、五年の四月に京都に行ったというわけなんです。

今西 六〇年安保の一年前ですね。

西里 そうそう。

(二) 六〇年安保闘争

西里 だから、入った途端に、また宇治分校³³で。

今西 まだ当時、宇治分校ですか。

西里 宇治分校でしたよ、僕は。宇治分校で、安保問題のクラス討議がもう始まっていた。安保闘争というかたちで、第一次行動、第二次行動以後、僕は毎回参加しましたから、京都での安保反対の集会・デモ行進には。

今西 誰と同級になるんですか。井口和起³⁴さんとか。

西里 うん、井口君が同じクラスでしたね。他のクラスには松井芳郎³⁵君。

今西 松井芳郎さん。

西里 彼も同学年だったし。それに、ブント(共

産主義者同盟⁽³⁶⁾の渥美君というのがいるよね。
渥美文夫⁽³⁷⁾。

今西 あのことろ、ブントは北小路敏⁽³⁸⁾が。

西里 そうそう。北小路という人は僕らより三期か四期ぐらい上だから。

今西 うん。彼が委員長で、全学連（全日本学生自治会総連合⁽³⁹⁾）の。

西里 彼の演説にも、かなり魅せられたね。

今西 北小路さんは演説がうまいですからね。

西里 うん。

今西 私も高校時代に彼の話を聞いたことがあります。

西里 演説はうまかったよね、彼はね。

今西 すごくうまいですね。格好良かったですね、すごい。

西里 格好良かった。

今西 彼はね。

西里 うん。大学に入った年から始まった、全国⁽⁴⁰⁾の安保闘争で、僕は金がないから東京までは行けなかったんだけど、京都での行動には、可能な限り参加しましたね。

今西 あのことろは、日本史はすごかったでしょう。芝原拓自⁽⁴¹⁾さんとか。

西里 そうそう、国史研究室には。

今西 鈴木良⁽⁴²⁾さん、安丸良夫⁽⁴³⁾さん、みんなそう

ですけど。

西里 原秀三⁽⁴⁴⁾郎さんもね。

今西 原さんは静岡大学ですよ、出身はね。

西里 ああ、そうですね、大学院の時に。

今西 大学院で移ったんですね。

西里 僕らの一期後輩には、広川君がいたし。

今西 広川禎秀⁽⁴⁵⁾さん。

西里 うん。その他、都出君がいたし。

今西 ああ、都出比呂志⁽⁴⁶⁾さんね。

西里 うん、都出比呂志君ね。

今西 東洋史は狭間さんたちは上ですか。狭間直樹⁽⁴⁷⁾さん。

西里 狭間さんは僕らより二つ上だね。藤田さん、佐竹（靖彦⁽⁴⁸⁾）さんが一つ上だ。

今西 藤田敬一⁽⁴⁹⁾さんですね。

西里 うん。森正夫⁽⁵⁰⁾さんは三つ、四つ上だな。

今西 いや、だって狭間、藤田って有名人じゃないですか。

西里 うん、有名。

今西 活動でもすごく。

西里 うん。そうですね。

今西 では、もう入るなり六〇年安保を率先して。

西里 うん。そうですね。

今西 そうですよ。だから、そのころはもう既

に、京大も少し慌ただしくなっていく時期で。ただ、あのことろはまだ意見の違う者同士でよく議論しましたけどね。天下国家の問題を。そういう議論の中で、沖繩というのがなかなか入りにくい。

今西 うん。やっぱり沖繩問題は入りにくい。

西里 そうそう。何かね、安保条約の適用範囲に沖繩が含まれるということになれば、日本が戦争に巻き込まれるんじゃないかというような、そういう懸念があつて、なかなか沖繩の問題というのに踏み込めない、踏み込みにくいという状況が一方にあった。

他方には、沖繩に対する無関心とか、あるいは、無知的なところがあつて、それをどう啓蒙していくかということに、僕らは気を遣ったね。沖繩から来ている、同じ沖繩出身の学生は何人かいたんだけど、彼らを集めて沖繩県学生会をつくって活動して、一般の大学生に問うて、それを大学祭などで報告していく。そういう活動はやりましたけどね。

今西 反米で反安保だけど、沖繩問題はなかなか入りにくい。

西里 入りにくいという側面があつたんですね。

今西 まあ当時の関心の中には朝鮮問題もあまり入れなかったですからね。確かに民族問題は

ちよつと弱かったというイメージなんです。

西里 そうそう。

(三) 沖縄返還運動へ

今西 先生、その時は、もうあれなんです、沖縄では、祖国復帰論という考え方はあつたんです。六〇年の時というのは。

西里 いや、祖国復帰論というのが定着するのは、もう少し後ですね。

今西 もうちよつと後ですか。

西里 沖縄では五〇年代から六〇年代の初頭までは日本復帰論¹⁾ですよ。

今西 うん。

西里 日本復帰論から祖国復帰論に転換していくというのが一つのかなり重要なエポックになっているんじゃないかと思うんですけども。

今西 うんうん。

西里 その前は日本復帰論です。だから日本復帰期成会や日本復帰促進期成会²⁾とかいう名称ですよ。沖縄の中では、もともと、京都では沖縄返還。

今西 ええ。沖縄返還闘争をやられたんですか。

西里 はい。だから、そのための組織として、関西沖縄県学生会というのをつくって、そこが引っ張っていくというような運動をやりまし

けど。

今西 それは沖縄の瀬長さんたち人民党と呼応していたわけです。

西里 うーん、一応、呼応していたと思います。

だつて、四・二八海上大会³⁾等に代表を派遣するために、いろんなカンパ活動とか宣伝活動とか、ああいうものにかなり時間を取られて、あまり勉強してないということがありましたけど。

今西 だけど、六〇年代、率直に言つて復帰運動はあまり当時知られてないですよ。京都でそういう運動をやっていたということもね。

西里 そうそう。だから、要するにもう、日本国民の沖縄に対する関心をどうやって引き出していかということが課題でしたから、そのために、先頭に立たなきゃいかんのは沖縄出身者だという位置付けで、われわれは各大学に県学生会をつくり、それを連合して、関西沖縄県学生会というのをつくったわけです。それが東京とも連絡を取り合つて、あるいは九州とも連絡を取つて全国組織にしていくということで、復帰行進というのがあったのでね。国民大行進つて。

今西 ああ、そうですか。

西里 その復帰行進、沖縄返還行進に参加していく。それぞれの地域の行進は、それぞれの県

学生会が責任を持つということでしたから、僕なんかはもう二月、三月のあの寒い時期にね、丹後とか、京都の北部辺りまで歩いて、雪の中を行進したという。

今西 それは何年ですか。行進されたのは。

西里 それは、六〇年代に入ってから。

今西 六〇年代の初頭ですかね。

西里 そうそう。前半だね、六〇年代の。だから、そのころには沖縄にも祖国復帰協議会（沖縄県祖国復帰協議会⁴⁾）というのがあつて、復帰協だね。

今西 ええ。

西里 六〇年の四月に創立されているから。その後ですよ。

今西 それは運動としてはあれですか、社会党とか共産党は支持してくれたんですか、割と。

西里 そうそう。うん。

今西 そういう学生運動のほうも。

西里 京都でも、そういう運動には支援するといふかたちはあつただけだね。

今西 それ、革新勢力のほうに呼び掛けたんですか。自民党とか、そつちは駄目だったんですか。

西里 あんまりそういうことは考えなかったね。

今西 ああ、そうですか（笑）。

西里 町長とか、どこそこに行ったら行政のト

ップに会って訴えるということをやっていた感じ。
今西 でも、率直に言つて、沖縄問題は関心が低いわけでしょう。

西里 低い、低い。ものすごく低かったですね。

今西 当時だったらね。

西里 沖縄がどうなっているかというふうなことにについて、あまり知識がなかったということもあるんでしょうね。

今西 安保条約での沖縄の基地問題とか、そういうのでも、ほとんどなかったですね。

西里 なかった、なかった。

今西 当時の関心がね。

西里 そうですね。

今西 私が本格的に運動に参加するのは、六五年の日韓闘争ぐらいからですけど、その時でも朝鮮問題とか、全然、沖縄問題は関心なかった（笑）。率直に言つてね。

西里 だけど、そういう訴えが一つのきっかけになったかどうか分かんけれども、やっぱり一定の反響はあったような気がするんですよ。

今西 ああ、そうですね。

西里 メディアがまた、そのころから取り上げてくれるようになってきたこともあると思うんですけどね。

今西 うん。でも、沖縄って本当に、やっぱりあんまり関心がなくて、やつと大江健三郎⁵⁶さんや中野好夫⁵⁷さんたちがちよつと沖縄のことを書いたり何かして、ちよつと話題になったりしたぐらいですよ。

西里 そうそう。六〇年代から、そういう空気が出てきたと思うんですね。

今西 どれぐらいの組織だったんですか、その復帰、学生の運動体というのは。

西里 各大学に在学している沖縄出身者が中心です。京大の場合は、何人ぐらいたったかな。大学院等も含めて二十名ぐらい入っていると思います。

今西 それは、京大で学生運動やっている人たちとも交流はあったんですか。

西里 一応ありましたね。いや、交流があったというのかな、同学会で宣伝してもらうとか、あるいは大学祭等で宣伝の場を与えてくれるとかね。そういうことを頼むというときには、みんなやっていましたね。だから先生方とも、池上⁵⁸（惇）さんとか、尾崎（芳治）⁵⁹さんとかさ。

今西 ああ、それは好きですから（笑）。

西里 カンパとりに行つて。

今西 経済学部の中ですね。

西里 一緒にしたけど、うん。

今西 でも、それは自分が学生運動の経験者ですからね、池上さんとか尾崎さんぐらいになると。

西里 そうですよ。

（四）学生生活

今西 当時の沖縄の留学生の生活はどうだったんですか。立ち入ったことを聞きますけど、どれぐらいの奨学金がもらえたんですか。

西里 ああ、それだよ、問題は。

今西 ふふふ（笑）。

西里 僕は、自費といつても委託学生というかたちで、沖縄の、琉球火災株式会社と言ったかな、琉球火災から月々三十ドル提供されるといふ。

今西 三百六十円レートで三十ドルですか。

西里 そうそうそう。だからどのぐらいになるのかな。一応、三十ドルあれば、何とか食いつなげるという状況ではあった。ただ、本を買うとか、何か余分な支出というのは、ここからは出てこない。だからバイトしないといかんということなんだけど、バイトは、もう家庭教師以外にも、いろんなバイトをやりましたよ。大掃除のときに縁の下に入つて大掃除をするとかね。あるいは祭りの時、祇園祭の、あの、何だ。

今西 綱引く。

西里 うん、鉾の綱を引いたり。あれは良かったですよ。

今西 時代祭とかね。

西里 うん。映画のエキストラで疎水に飛び込んだりとか。

今西 六〇年代の京大の学生って、バイトはそういうのが多かったんですよ。

西里 うんうん、いろいろなものやりましたね、ほんと。何とかあれで欲しい本は買えるというんだけど、あのころは、しかし。

今西 保険なんかどうしていたんですか。国民健康保険に入れないわけでしょう。

西里 うん、入れない、持っていない。

今西 当時は。外国人というか、日本人として扱ってもらえないわけですからね。

西里 うん、でもね、食料券みたいなのがあったでしょう。

今西 うん。

西里 あれはもらえたよ。

今西 ああ、そうですか。米穀通帳とか、ああいうのももらえたんですか。

西里 そうそう、そうそう。だから、それは同じように同等に扱ってくれた。

今西 ああ。でも国民健康保険、国民年金は駄

目ですよ。

西里 そういうのは全然知らなかったね。

今西 では、病気がしとき、あんまり病気がされなかったんですかね。入院したとき。

西里 病気になる暇がなかった。

今西 ふふふ(笑)。ですね。ああ、運が良かったですね。

西里 だから、いろんなアルバイトで、高校に非常勤で行ったり。洛北高校とか紫野高校、紫野は、僕は夜警というのか。

今西 ああ、夜勤ね。

西里 夜勤。夜警といったかな。

今西 ですね、当時は。

西里 今の用務員、用務員じゃなくて。

今西 まあ小使さん、当時は。今は用務員なんですよ。

西里 それをやっていましたからね、二日に一回、二人ペアで交代で夜警をやっていた。大文字の送り火の時には、いながらにして送り火を見たり、読書したり、いろいろと利用できる時間があった、いい条件のアルバイトでしたね。

今西 沖縄人だから差別を受けるとか、そういうのはあんまりなかったんですか。直接、そういう経験はもたれたことはないですか、あんまり。

西里 こだわれれば、差別に値するかも知らんけど、あんまり自分としては意識しなかったんだ

けども、確かに、全然沖縄のことを知らんで質問してくるというのはね、やっぱり困惑したことがある。

今西 われわれの、例えば小学校の先生で沖縄から来た人がいたけど、そしたら、「あなた、ヘビ食べるのか」とか言われていました。

西里 そういう類いの質問ですね。

今西 そういうことを平気で言うという瞬間はありましたよね。

四 東洋史の研究

(一) 民族問題への関心

今西 東洋史は、当時は宮崎(市定)⁶⁰先生。

西里 うん、東洋史に入った時は、宇治分校は一年だけだったから。

今西 ええ。

西里 京都市内に入ってから、僕は「哲学の道」沿いの疎水のすぐそばに下宿していたからね。宮崎先生のお宅に近いところ。

今西 東洋史に行こうと思ったのは、その時は、やっぱり沖縄のことをやろうと思われたんです

か。

西里 うん、それもあつただけだね。卒業論文のテーマというのは、清朝の少数民族の問題ですよ。

今西 ああ。直接沖縄問題ではなかったんですね。

西里 そう。沖縄問題は一応念頭にあるんだけど、清朝と西南諸省の少数民族。で、副題が「改土帰流をめぐる」なんですよね。改土というのは、土を改めて流に帰すというね。土というのは土着のシステム、それを取っばらつて、流というのは流官、つまり一般官僚の支配に帰すというような。要するに、日本流に言えば、廃藩置県なんだよね。

つまり、それを清朝が文明化の一環として西南諸省に展開していく。その際の、清朝と西南諸省の少数民族の関係というテーマなんだよね、卒論のテーマは。少数民族というのがどういうふうに中国史の中で位置付けられてきているかということを問題にしたということなんだけども。

ちょうどあのころ、宮崎先生の『雍正帝』という岩波新書^④を手に入れて熟読したんだよね。

今西 ええ、名著ですね。

西里 これに相当影響されたということが一つ

はあるんですね。清朝の雍正期に支配システムが確立している。その中で少数民族がどういうふうな位置付けられているかというところに僕の関心はあつただけけれども。そもそも、満洲民族というのが少数民族なんだよね。その少数民族たる満洲族が支配民族になる。その支配民族たる清朝が、他の少数民族にどう対応しているかというところに、僕の関心の一つがあつたんだけれども。そういう問題を選ぶということ自体が、既にもう沖縄問題。

今西 うん。まあ少数民族問題ですね。

西里 そういうことになるかもしれないですね。

今西 日本史へ行くという選択は、あまり考えられなかったわけですか、当時は。

西里 僕は高校のころから、恩師のほうの指導で、アジア史に目を向けるようにというアドバイスもあつたので、東洋史を選んだということもあるけどもね。

本来、僕の志向というのは、むしろヨーロッパ、西洋にあつたんですよ。だから、フランス革命以降の自由・平等・博愛という、あの理念。それに、むしろ引かれていた面が一面はあつたんだけれども、当時は沖縄に引き付けていうと、やっぱり民族問題に収斂していくような、そういう傾向が自分の中にも強まっていくな、う

とがあつて、恩師が言う、京都には錚々たる東洋史学の研究者、学者が集まっているという意味は、そういうことがあつたろうと思うんですよ。東洋史のほうの。

今西 そうですね、宮崎先生はじめ、錚々たるメンバーですから。京都民科（民主主義科学者協会京都支部歴史部会 現…京都民科歴史部会^⑤）とか、ああいうのには参加されたんですか、少しは。

西里 民科にはあまり熱心でなかったね、僕は。

今西 藤田さんのように民科を一生懸命やるのか、そういうことはなかったわけですね。

西里 いや、機関誌はもらつて。

今西 ああ、『新しい歴史学のために』ね。

西里 『新しい歴史学のために』はずつと読んでいましたけれども、何かやっぱり理論倒れのような感じを受けたね。

今西 うんうん。あのころ、特にマルクス主義の再検討みたいなことをやっていましたからね。

西里 うん。方法論は非常に大事だとは思いますが、方法論的に、概念ですばすば切つていけると、ついていけないというところもあつて。民科で展開されている議論、関心はあつたんだよね。中村哲さん^⑥なんかの理論等も東洋史で影響を受けた人はたくさんいるわけですよ。

今西 それは、もうちよつと後ですよ。渡辺信一郎さんとか。

西里 そうそう。

今西 足立(啓二)⁽⁶⁵⁾さんとか、あの辺の世代ですからね。もうちよつと後の。

西里 うん、後の世代になるんだけどね。

今西 ええ。もうちよつと上では、島居一康さんとか、あの辺なんですかね。

西里 島居君は僕らより一つ下の学年ですから後輩になるんだけど。そうそう、島居君や吉田滋一⁽⁶⁷⁾君や。

今西 あの辺は大学紛争、六八年の紛争を経過する中で、かなり出てきた人たちですよ。⁽⁶⁸⁾

西里 そうそう、そうですね。

(二) 学恩を受けた人びと

今西 その頃、里井彦七郎⁽⁶⁹⁾さんは助手でおられたわけでしょう。

西里 はいはい。だから、里井彦七郎さんから影響もかなりあったと思うんですね。

今西 義和団事件とか。

西里 はい。そうですね。僕にとつては、小野信爾⁽⁷⁰⁾さんの存在が非常に大きい。

今西 ああ、小野さんはいましたね。小野さんは、だけど当時は、花園大学に行っておられた

んですよ。

西里 そうそう。けども、人文研(人文科学研究所)の研究会等にはね、小野さんも。

今西 ああ、むしろ人文のあれですか、東洋史のほうの研究会中心だったわけですね。

西里 そうそう。はい。奥さんの小野和子⁽⁷¹⁾さんか信爾さんに来てもらって。

今西 ええ、小野和子さんですね。最近、彼の獄中記録が人気が出てきまして、今度、京大出版会から本にするというので、小野和子さん、頑張っていますよ。

西里 信爾さんの獄中日記？

今西 そうそう。彼は占領中に捕まって軍事裁判に出たでしょう。

西里 ああ、そう。

今西 その記録を今度、京大出版会から本にしたいといって、小野和子さん、頑張っていますよ。⁽⁷²⁾

西里 なるほど。

今西 この前、ちよつと電話でお話して、事実を教えてくださいと言われてあれだったんですけど。小野和子さん、年齢的には小野和子さんのほうが近いですよ、先生にはね。

西里 いや、信爾さんも和子さんも、僕らより。

今西 信爾さんのほうが上ですけどね。

西里 十年ぐらい上ですから、大先輩ですよ。

だから、僕の卒論なんかは、具体的には小野信爾さんとか和子さんなんかの指導があった。

今西 ああ、人文研でやつぱり。

西里 そうそう。人文研の研究會。特に、宮崎先生や佐伯富⁽⁷³⁾先生、小野川(秀美)⁽⁷⁴⁾先生らの主宰する硃批論旨研究會というのがあって、それに参加して漢文史料の読解力を身につけるとともに、個人的には卒論に関連する具体的な史料の読み方等も含めて、小野さん夫妻からいろいろな指導を受けたということですね。

今西 その東洋史では、もうずっと清朝の研究をおやりになったんですか。

西里 東洋史の領域で言うところ。

(三) 大学院時代

今西 大学院の時代は。

西里 大学院に入ってから、また相当関心の焦点が転移して、むしろ経済史の中でも近代をやるうということ、修論のテーマは「清末の寧波商人について」、「浙江財閥の成立に関する一考察⁽⁷⁵⁾」という副題を付したテーマになったんですよ。

あの当時は、内外の政治経済状況、研究動向も大きく転換しつつあって、それを反映してい

と思うんですけども、近代化の過程で洋務運動というのがどういう役割を果たしたのかという問題をめぐって、中国国内でも論争があつて。

今西 日本史でもそうですね。

西里 日本でもそうですね。

今西 遠山（茂樹）⁽⁷⁶⁾さんと芝原さんの論争とか。

西里 はい。遠山・芝原論争もそのあたりを受けていると思うんですけども、具体的にそれに切り込むためには経済史をやらないといけないということで、近代化というかたちで中国が進んでいくときに、中国の伝統的な経済組織が近代的な経済組織に転換していく契機というか、きつかけは何かというふうな点に注目して、寧波商人から浙江財閥へというルートを考えるようになったんですけども。

その過程で、経済と政治の癒着というか、密着ということが非常に大きい力を発揮する。浙江財閥の財力を利用する、蒋介石が近代化を主導するわけですね。四大家族を中核として。蒋介石自身は、寧波出身で、寧波商工地域との地縁的なつながりで、経済、財界と結び付いていくということがあつて、政治と経済との関係というのも非常に大きな関心になってきたんだけども、その過程で歴史的にはもつとさかのぼ

れば、いわゆる山西商人とか徽州商人とかいう商人団体が政治的にも重要な役割を果たしているということが分かってきた。

その延長線上で、寧波商人にアプローチする過程で、いわゆる買弁⁽⁷⁷⁾というのが出てくるわけです。外国資本との仲介役を担う、この買弁の役割ということも非常に大きな意味を持つてくる。そういうことから、浙江財閥の本質は買弁資本だというようなことを突き止めようということ。

今西 当時の中国の資本主義の萌芽論争⁽⁷⁸⁾とか、ああいうのに影響を受けて。

西里 そうですね。資本主義の萌芽論争とも関わりながら。だけど、買弁というのは、あのころは非常な否定的な位置付けでしたよね。

今西 そうですね。中国共産党の考え方は特にそうですから。

西里 共産党史観というのか、相当大枠が絞られていて。ただ、それだけではちよつと具体的な史実の評価や解釈はできないんじゃないかという疑問も同時に僕の中では広がっていくということがあつただけども、その経済的側面からのアプローチというのは、これはだんだん外交的な方向とどう関連しているかということが非常に気になってきて、買弁的な資本の、買弁

的外交という点に関心が向いたということがあるんですね。

今西 じゃあ、沖縄のことをおやりになったのは、もうこつちに帰つてこられてからですかね。

西里 いやいや、その過程で、当時の中国外交が日本に対してどういう対応をするか、あるいは他の国に対する対応はどうかということが問題になってくる。その時に浮上してくるのが、やつぱり日中間での琉球の問題。琉球が帰属問題⁽⁷⁹⁾というようなかたちで議論されているということで、これは僕にとつても、ちよつと強い関心を引き付けられたところであるわけです。

そこらあたりの外交史料を一つ一つ読み込んでいくプロセスで、だんだんこれは琉球問題が日中の間でどういうふうに議論されて、どういうふうに決着をしていくのかという、そういう外交史的なプロセスへの関心が、むしろ主流になって来るということがあつて、そこから琉球に関する中国関係の史料をずっと読み込んでいって、その中で『歴代宝案』⁽⁸⁰⁾という外交史料があるということが分かつて、それに打ち込んでいったというのが、むしろ沖縄に帰つてきてからのことになるわけです。

今西 だけど、『歴代宝案』の写しを持って帰つてこられたのは、小葉田（淳）⁽⁸¹⁾先生だったん

でしよう？ 小葉田先生と台湾にいたころの話とか、沖縄研究の話はされたことがあるんですか。

西里 もちろん、『歴代宝案』の編集委員をされておりましたから、編集委員会のあるたびに、この間の事情はいろいろお話しされて。だけでもう少し、詳しくお聞きしておくべきだと思います。聞き漏らしたこともかなりあるので。

今西 台北帝大（台北帝国大学）⁽⁸⁴⁾の先生をしておられたんですね。

西里 そうそう。人を雇って沖縄に派遣して県立沖縄図書館に移管されていた歴代宝案を写させたわけなんです。それが残っているということで、七〇年代の初めごろに影印本として何部か作成されて、東大（東京大学）とか琉大（琉球大学）等に入ってきたわけですね。それが一つの大きなきっかけになって、中琉関係にのめり込んでいくことになるわけです。

今西 先輩には金城（正篤）⁽⁸⁵⁾さんがおられたんですか。

西里 そうそう、金城さんは大学院の時に京都に来られて、僕よりも一学年上で、年は四つくらい違うんですけども、京都で大学院に入られたということですね。

金城さんの場合は、日本史から東洋史に移っ

てきたということですが、それにしても、やはり琉球が関心の焦点であるということで、共通のキーワードがあつて、僕が沖縄に帰ってくる前後に沖縄歴史研究会⁽⁸⁷⁾を組織していて、僕もそこに参加して共同研究をやつて、共同研究の成果をまとめて『近代沖縄の歴史と民衆』⁽⁸⁸⁾という本を出したんですね。

今西 そうすると、『沖縄県史』⁽⁸⁶⁾に関わられたんですか。

西里 そうそう。あのころから『沖縄県史』と『那覇市史』⁽⁹⁰⁾。僕は大学院終わつて沖縄へ帰つた後は、『那覇市史』の嘱託で一年半ばかり市史編集の仕事をするということになって、その編集計画の一つに『歴代宝案』の訳注本を出す企画があつて、あれは十年ぐらいかつたんですね。漢文を原文に読み下して、ちゃんと刊本にするまでには相当時間がかかった。あれにずっと関わつていて、それを踏み台にして、今度は沖縄県にその事業が移つて、県で当初は二十年だったかな。十五年か二十年ぐらいの計画、それがだんだん膨らんで、ずっと続いているという事柄なんですよ。

（四）沖縄差別について

今西 それで沖縄近代史研究に関わられて。

西里 そうそう。近代史研究に、むしろ引き込まれたというような感じですね。引き込まれたというか、状況が強いたという面もあるんですけども、若気の至りというのかな、恐れを知らずに。

今西 いえいえ。

西里 いきなり、あちこちに踏み込んで行つて、七二年の日本復帰の前後ですからね。僕が沖縄へ帰つたのが六九年だから、その前後に、沖縄では、政治状況の激動と絡みながら、七〇年代以降、新川（明）⁽⁹²⁾さんと、安良城（盛昭）⁽⁹³⁾さんとか、そういう錚々たる論客を相手にして。

今西 いやいや。旧慣温存論争⁽⁹⁴⁾という有名な。

西里 それをせざるを得なかつたという状況があるんですけども。

今西 中身を聞く前に、やつぱり復帰運動というの、七二年の沖縄返還条約の時、どういうふうにかえられたんですか。やつぱり返還条約には問題が多いというのはお考えだつたわけですか。

西里 そうそう、もちろんなんだけどね。基地付き返還反対とは僕が京都にいたころから言われていたことなんだけども。

今西 でも、沖縄独立論⁽⁹⁵⁾とか、ああいうのにくみするつもりはなかつたわけでしょう。

西里 うん、だから初めから僕は、独立論とい

うのは沖縄の歴史の転換期に狂い咲くあだ花じゃないかというふうな発言をしたものだから、相当集中砲火を浴びたんですよ。だけど、歴史上、琉球・沖縄史における転換期には、そういう独立論的な議論が必ず出てくるんですよ。

今西 そうですね。

西里 薩摩の侵攻⁽⁹⁷⁾の時もそうだったし、明治政府の琉球処分⁽⁹⁷⁾でもそうなんだけど、それが、どうもきちんと総括された上での議論になっていないということを、問題にしているわけ。僕の中にも独立論的な志向はかなり強くあるんだけどね、あるんだけど、その独立論を展開することの意義が、今の時期にあるのかということの問題提起したかったわけで、自らが解決できる問題を問題とせざるを得ないということがあって、にわかには、僕は独立論に賛成できないと。むしろ批判の側に回った。だから七二年前後には、反復帰論⁽⁹⁸⁾批判というのが、むしろ僕の、論文と言えるかどうか分からないけど、論文の中にはあるんですよ。

今西 でも、沖縄近代史研究なんかでもそうですけれども、沖縄が、割と早くから植民地的な位置に立たされたということは、先生が一番早く指摘された一人ですよ。

西里 うん。だから痛切に感じていた時期で、

金城さんなんかと一緒に出した『歴史と民衆』の中で僕が担当したのは、沖縄近代史における差別の問題、差別の構造という。あの時に副題として「差別の構造」という言葉を使ったのは僕が一番最初ではないかと思うんだけど。構造的差別という。

今西 うん。最近、みんな言っていますよね。

西里 そうなんだけど、僕も六〇年代の終わりごろに、沖縄近代史における本島と先島⁽⁹⁹⁾、沖縄本島と先島の関係を論じた時に、差別の構造が根底にあるんだということを強調したわけですよ。それは教条主義的な、図式的な捉え方であって、だから今から見れば大変未熟な作品ではあるんだけど。

今西 それはやっぱりあれですか、竹富島生まれという。

西里 そうそう、それが根底にあつて、一種の情緒論的な側面があるんですよ。

今西 いや、まあ情緒論ですか。

西里 だけど、情緒的な捉え方では差別は解決しない。僕はあの時期、今でもそうだけれども、一面、差別というのが克服する課題なのかどうかということが、絶えず頭によぎるんですよ。僕はあのころは克服する課題であると、克服すべき課題であるというふうに考えていたから、

じゃあ、どうやって、何を手掛かりにして克服できるのかという問題意識に展開していくんだけれども。

これは、差別を差別として意識するというのは、沖縄でも近代に入ってからなんです。その意識を覚醒してきたのは、むしろ近代、ヤマトから沖縄へ入ってきた人たちのおかげだという捉え方なんだよね。ヤマトから来た笹森儀助⁽¹⁰⁰⁾以降のいろんな人たちの現状批判の中で、沖縄が差別的状況にあるという指摘を受けて、指摘というか、ヤマトで近代化を見てきた人たちの目から見れば、沖縄に来て、依然として差別的な状況があるという現実を、沖縄の人たちにも気付かせていくというプロセスがあつたと思うんですよ。そこから、じゃあ、それをどう克服するかというときに、ヤマトの力を借りて現状を打破する、これが宮古農民の人頭税廃止運動⁽¹⁰¹⁾の一つの特徴だったというふうに思ったものだから、こういうふうな捉え方をしたんですよ。だから、そういう意味では、差別的な状況にある自らの現状をどう認識させるかと、どう認識しているかということが、まずは大事ではないかということの問題提起だったわけですね。七二年の日本復帰前後の独立論というのは、いろんな側面があるんだよね。例えば、山里永吉⁽¹⁰²⁾

さんの復帰運動を批判し否定するための琉球独立論が当初は主流だった。それが、返還協定に反発する反復帰論の雰囲気とドッキングして、一気に復帰そのものを否定していくというような流れになったような気がするわけですね。

そういう流れについては、僕は、歴史を逆戻りしてゼロから出直すということはできないんじゃないかというので、最後まで同調はしなかったということですね。

今西 新川さんなんかの議論があつた……。

西里 そうですね。だから、新川さんの反復帰論・独立論等に対しても、では宮古・八重山の歴史的な差別はどうするかという問題提起をしたのは僕のほうで。だけど、そういう問題提起の仕方が正しかったかどうかというのは、もう一度検証する必要があるんじゃないかと、今は考えています。

今西 その後、だけど、苦力(クーリー)貿易とか、ロバート・バウン号事件⁽¹⁹⁾とか、ああいうことをおやりになるわけですよ。

西里 そうそう。うん。

今西 あれをやられたのは、どういうきっかけでんですか。

西里 琉球史の特徴をどういうふうにつかんでいくかというときの方法論と関わる問題なんです。

すが。やつぱり、いろんな史料等を読みながら考えるというのが僕の癖なんだけれども、当時の外交史料等の具体的な史料の中では、琉球も一つの単位なんだよね。何の単位かというところ、国家単位なんだよね。琉球国というのは、やつぱり厳然として存在しているという前提で外国も琉球に対応してくると。琉球側の意識としても、やつぱり国家としての意識をベースにして対応していかざるを得ないと。

今西 琉球王朝だったわけですからね。

西里 うん。ということがあるので、それは無視できない存在なのだと。

ところが、七二年復帰前後の琉球・沖縄史の研究においては、琉球の民衆がどう考えようと、客観的には琉球処分というのは解放であるという捉え方が根強くあつた。

今西 だから、戦前から伊波(普猷)⁽¹⁰⁾さんの奴隷解放論⁽¹⁰⁾なんかもあるわけ。

西里 そうそう。そういう潮流の中で、沖縄に住んでいる人たちの意思というのは歴史の進歩には関係ないんだという捉え方は、何か上からの目線に見えるわけね。こっちから見るとね。

だから、やつぱり問題なのは、琉球側の主体的な意思、民意、民衆の意思というのを、どのように捉えるのか、いろんな捉え方があるんだ

ろうと思うけれども、一つの国家としての単位、歴史的な個性というものの意思は厳然と存在するわけで、それを無視していいものかどうかというの、僕の一つの大きな疑問点として浮上してこざるを得ないということがあつた。

そういう視点から見ると、これまでの琉球は日本に属するか清国に属するか、という、

今西 ええ、両属……

西里 いわゆる所屬問題というのは、勝手に日清(日中両国)が提起している問題の仕方であつて、琉球側から問題を提起するとしたら、琉球の主権が守られるのか、失われるのかという切実な問題になつてこざるを得ない。これは、琉球を一つの歴史個体、歴史的な主体という点で見れば、琉球の上層士族層、支配層の願望にすぎないという説明だけでは納得できないようなね、いろんな史料を読み込んだ後の印象というの、どうしても残ってしまうということがあつた。

そこから、もう一度見直すということにすれば何が見えてくるかというので、琉球側の民意、主体的意思というのを主軸にしたときに、これまでの対日関係、対中関係というのを、相対見直す必要があるという現実を突き付けられているのではないかと。それはやつぱりね、七〇年

代から八〇年代にかけて、それ以降に大量の史料が発掘されてきたことと関係がある。

今西 ああ、中国側は特にね。

西里 中国側からも、琉球側でも、日本の側でも大量の史料が出てきたという客観的な背景があるんです。その史料の一つが琉球側の『歴代宝案』。中国側からは档案史料という、すごく膨大な史料が出てきた。台湾側の故宮博物院などからも貴重な史料が出ている。琉球側でも『歴代宝案』の他に、『琉球王国評定所文書』^⑩という、それは僕も関わったのだが、一九年かかって浦添市史編集室から編集刊行された。その書名の付け方についても相当議論したんだけど、最終的に『琉球王国評定所文書』という名称に落ち着いて、全一九巻、一八巻プラス補巻一で全一九巻の膨大な史料集が刊行されたわけです。

それらの史料を読み込んでいけば、琉球が一つのちゃんとした意志を持つ個体、歴史的主体であるということは誰でも認めざるを得ない。その琉球側の主体的意思が、琉球処分のプロセスでどういうふうに取り扱われたかということが、僕らの関心でなければいけないのではないかとという問題提起を、僕はしたつもりなんだけども。

うーん、でも僕の問題提起というのは、日本

史の研究者の中でも、中国史の研究者の中でも、自分たちに不都合な事実として、見て見ぬ振りをするという何があるんだよね（笑）。

今西 そんなことはないと思いますけどね。いや、琉球尚王朝の評価は、やっぱり変わってきているし、そういう琉球側を主体として見なければいけないという意見は、村井章介をはじめとして、やっぱり言いだしてきていますからね。

西里 うん、だから具体的な歴史分析、叙述の中で、それがどう生かされているかと。

今西 これからだ、まだ思うんですけどね。

近代史が今そんなに議論が起こっていない。

西里 いや、六〇年代の終わり、七〇年代の初めごろにも同じような見方が『歴史学研究』^⑪などでも出ていた、盛んに言われたけど、その後、琉球の意思を組み込んで叙述されたかという、なかなか。

一つの例をあげると、いわゆる琉球分割問題^⑫。それをどう捉えるか。分割問題というのは、琉球側の意思を飛び越えたところで、頭越しにやられているわけで。うん。だから、それに対しては琉球側からは強烈な反応があつて、琉球分割が阻止されたという、その事実を認めたがらない。そこらは、やっぱり歴史意識の落差というのかな。だから、北海道におられた井上、

今西 ああ、勝生さんね。

西里 そうそう。彼の岩波新書の中でもこの問題は全く出てこないんですよ。

今西 あの新書はちょっと問題の多い新書で（笑）。

西里 それは分かんけども。

今西 いやいや、やっぱり彼の場合は幕末史の人ですからね、近代史がほとんど書いていないところがあつて。

西里 総体的に言えば、提起した問題というのが、ほとんどというか、あまり受け止められていないのかなという感じを受けているところですね。

今西 うん。ちょっとここぐらいで休憩して、また若い人たちから質問があると思いますので、ちょっとお休みで。

五 差別の実態など

今西 夕食も付き合っていたいただいてよろしいですか。一緒に。

西里 まあ、いいですけど（笑）。

今西 すみません。その時に、また自己紹介をしてもらいますので。

西里 はいはい。

今西 ちょっと質問をしたくてうずうずしている人がいるでしょうか、どうぞ聞いてください。

広瀬 じゃあ、私のほうからちょっと細かいお話を聞きたいんですけど、先生の高校生時代に、

文芸クラブに入って活動されながら高校生集会などに参加されたというお話でしたけれども、このあたりのそういう高校生の活動の中で、女学生なんかも活発に動いていたんでしょうか。

西里 女生徒も一緒にやっていましたからね。

広瀬 それは、もう本当に男女関係なく、意思のある人が参加する。

西里 そうそう。文芸部の合評会なんかは、むしろ女生徒のほう積極的だったような印象を受けますね。

広瀬 ああ、そうですか。

今西 どうぞ。

石川 石川と申します。今日は本当にありがとうございます。最初に生い立ちのことをお話しくださった時に、八重山というのは沖縄ではないという、そういうことを話されたと思ったんですけれども。

西里 そうそう。

石川 先生のご論文を拝見していても、一

貫して沖縄の中での差別というのが非常に重要な問題なんだということを言われてこられたような気がするんです。実際に体験された、例えば那覇に來られて、八重山から來たことについての差別とか、あるいは引け目を感じたとか、そういうご経験はあったんでしょうか。

西里 うん、具体的にはね、一九五六年に那覇高校に入学して、当初、同じクラスにね、宮古島出身の生徒もいたんです。僕は八重山から來たということで、ほかの沖縄本島の生徒たちは、何かというところ、エーマンチュ、メークンチュ^①というような言い方で、やっぱり区別するという何がありましたよね。

それで、こつちにちよつと都合の悪いことになる、本島出身の生徒たちは方言でしゃべって、「おまえ、俺の言っていること分かるか」という意味の沖縄語（ウチナーグチ）で聞いている。もちろん僕は沖縄の言葉は全然というか、ほとんど理解できなかった時期ですから、何を言っているかというので、ちよつと反抗的に対応したことがあるんだけど、それがきっかけで相当いじめに遭ったということはありましたかね。そういう雰囲気というのは、今はどうなのかな。

もちろん、僕が沖縄本島の言葉がある程度理

解できるようになって、意味が通じるようになってくると、そういういじめというのは通用しなくなってくるんですけど。こつちも、けんか早いほうだから、言われたら言い返すということができるようになるのは、ちよつと時間がかったですね。一年ぐらい。

石川 それは、単に外から來た人を排他的に始めるということではなくて、ちよつと見下しているということでしょうか。

西里 そうそう。試しているというのかな。見下しているというのかな。おまえはウチナーンチュかと言わんばかりの問い掛けがあつて、当時は何を言っているかも分からないというくらいだ。こつちにはあつて、反抗的な態度だったりしたということもありました。

沖縄本島の言葉というのはね、竹富にいる時期には、それに接する機会は年に一回か二回ぐらいですよ。これは祭りのときにね、沖縄語（竹富ではウシナーム二と言っていた）で演じられる演し物があつて。

石川 ああ。芝居みたいなもの。

西里 これで非常にカルチャーショックを受けただけでも。ほとんど理解できない。ただ、演者のしぐさや表情を観て、ある程度、ああ、こういうことを言っているのかなという予想が

できるぐらいではあったんだけど。

だから、そういう状況の中では、沖縄に行つてくるといのは外国に行つてくるといような感じになつて、沖縄に行くといのは外国に行くような印象を持っていた時期でしたね。

石川 それは、沖縄から何か芝居を演じる人が竹富に来てやるのか、そういう事情で沖縄の言葉でやつていたんですか。

西里 いやいや。竹富の人の中に、沖縄に行つて言葉を習得した人が帰つて、それで芝居を演じるんだけど、それはウチナーグチ（ウシナムニ）でやるわけよね。だから、ウチナーグチというのはこんなものかという、一つの大きなカルチャーショックのような感じを受けましたね。

石川 それは、やつぱり沖縄のほうが文化的に高いんだとか、文明的であるとか、そういう印象を持っていたということでしょうか。

西里 うーん、それは一面あると思います。石垣も、われわれにとつては先進地域ですから。車が走つとるし、電気はあるしね。そういう文明世界というのは、一つの憧れでもあるんだけど。

竹富にいたころは、だから、石垣で小中学校に通っている同年代の竹富出身の人が、たまに

竹富島に帰つてきて、お互いに情報を交換するんだけど、僕はあの時に強く印象づけられたのは、僕の方では俳優と女優を区別せず、美空ひばりは俳優だというようなことを言ったら、石垣から来た連中がどつと笑つたことがあつた。というので、えつ、何で美空ひばりは俳優じゃないのかという疑問を持つたりした時に、俳優と女優は違うんと言われて、ちよつと差別されているのかなという印象を受けたということもありましたけどね。

要するに、流行遅れですかね、竹富というのは。情報がそれだけ遅いというのかな。

石川 逆に、あんまりいい記憶じゃないかもしれないんですけど、本島の人が八重山の人を差別するとか、ばかにしたという理由ですね。なぜ、差別してもいいというふうに考えたんでしょうか。例えば、遅れているとか、そういう印象だったんでしょうか。

西里 うーん、それはいまだによく分からないところがあるんだけど、歴史的なイメージというのがあるのかなというふうな気はするんですよ。一つのやつぱり、宮古はどうなのか。八重山なんかの場合には、一種の流刑地として利用されているというのがあるみたいで。一同 うーん。

西里 だから、そういう目で見ると、八重山というのは流刑地というようなかたちのイメージとして位置付けられているのかなというような気もするんだけどね。

ただ、私の伯父にあたる人が首里から来ているんですよ、竹富島に。護得久（ごえく）という人なんです。護得久というのは首里でかなり地位のある人だったみたいけども、その一族というか、その一人が八重山まで来たというのは何でかというのは、ちよつと疑問があつたのに、ついに聞く機会を失つてしまったんだけどね。

ただ、その人は、竹富では唯一の文化人のようなところがあつて、お経は読むし、三味線、芸能はやるし、散髪屋もやるし、そういう文化的・文明的な要素というのを持ち込む役割も一面では持つていたよう気もしますけども、なんで八重山くんだりまで落ちてきたかというような話になると、ちよつと分からなくなつたんですね。

いろいろな史料を見ると、どうも、伯父に聞きそびれたので何とも言えないのだけど、琉球処分時期に、かなり沖縄本島から八重山へ来ているんですよ、首里から八重山にね。その一人なのかなというふうな想像をしたりして

いるんだけど。一応、文化的にたしなみを持ったシュリンチュ（首里人）が、わざわざ八重山、竹富にまで来て、ここに定着しているということは、どういう事情があったのか、これは僕もいまだにまだ分からないところもありますけれども。

そういう点では、差別というのは、具体的な人間を通して表出するので、そういう点では僕はあまり、沖縄本島にいるウチナーンチュ全体がどうだというふうな印象はあまりないですね。

石川 ありがとうございます。

それで、もう一つお尋ねがありまして、先ほどちよつと言われていた七〇年代の先生の文章です。近代沖縄の課題と差別問題というような文章とかを拝見しまして、今お話しいただいた沖縄の中の差別の問題ということと同時に、復帰といいますが、日本に戻って民族的な統一を果たすことが、歴史の自然な流れであるというようなことを強調されているように思ったんですけれども。

そこは、たぶんいろいろな葛藤もおありになったのかなと思うんですけども、自分が日本民族である、その一人として、そこに帰るべきであるという考えは、当時どういうふうにか

えられたのかということ、ちよつと詳しくお聞かせいただけませんか。

西里 うん、そういうことはありますよね。

石川 はい。

西里 だから、何と言ったらいいのかな。要するに、日本復帰から祖国復帰へという意識の転換って、この時期だと、これは七〇年代初頭、初期だったかな。いつごろ書いたんだったわけ。^⑫

石川 「沖縄における「反復帰論」とその周辺」は七一年。「祖国復帰運動史の総括と教訓」が七〇年。

西里 そうそう、七〇年代初めごろですね。その前後には、日本は祖国だというふうに思い込んでいるというところが確かにあつて、それに対して、新川さんあたりが祖国を相対化する必要があるというようなことを盛んに言われていたんです。今から見たら、確かにそういう必要があつたと思うんだ、あの時期に。

石川 はい。

西里 それを、われわれは、僕も含めてそんなんだけど、無理に思い込もうとしたところがある。日本は祖国というふうに思い込もうとした。実際、そういうふうに僕も思い込んでいたところがある。

ただ、そういう枠組みから見ると、日本が相対化できないような、視野狭窄に陥る何かがあつて、それではいかんということに気がき始めるのは、もう七〇年代の後半に入ってからということになると思います。

もつとも、あの時期に、僕の中にもそういう、沖縄の中の民衆意識の基底に存在する自立志向みたいなのがなかったかといえば、そうじゃなくて、『歴史評論』の三〇〇号だったかに、沖縄歴史研究会の署名で共同で書いた、何だったわけ、あれは^⑬。その前文（はじめに）の所で、一応、沖縄の中の研究状況、研究動向を概観した時に、三つの研究潮流を取り上げて、自らの立ち位置を見極めるにあたつて、かなり無理な位置づけ方をしたことがあるんだけど、ここでもやっぱり、一人の研究者の中にも、自身の中にも、復帰論的志向と反復帰論的志向がともに存在することに言及したと思います。だけど、あの時点では、どこに主軸を置くかというところで言えば、復帰という流れは当然推し進めるべきものだというふうな前提に立っていただけです。ね、あの当時はね。

石川 はい。

西里 だから、その当時、復帰に条件を付けるべきだというふうな発想は出てこなかったんで

すよ。そういう条件付き復帰というのを言っていたのは、山里永吉さんの復帰反対、琉球独立論がそうでしたよね。今から考えたら、やっぱり、こつちが要求している基地撤去ができなければ独立するぞという選択肢は、むしろ、あの時点で出しておくべきだったというふうな反省もないわけではないですけども。

ただ、あの復帰前後には、時間をかければ何とか、われわれの要求は一つ一つ達成されるであらうという樂觀主義なんだ。それが大きく支配しているという中での発想ですから、もう少し歴史の検証が必要になってくるという、かなかな期待がありましたね、あの時期は。だけど、その期待がだんだん裏切られるというか、実現しないということが分かってくるのが九〇年代、二一世紀に入ってから、ますますそういう状況がはつきりしてくるという中では、七二年の復帰前後の立ち位置というのは、検討し直す必要があるのかなというふうには思っております。

歴史というのは、また後ろにとんぼ返りするわけにもいかないので、どういうふうにかこれから組み立てていくかというのは大きな課題にはなると思うんです。

石川 二〇〇〇年代だったと思いますが、藤原

書店の『環』という雑誌に自治問題について先生のお書きになった文章があつて、そこでは、総括してみれば第三の選択肢というのもあり得たかもしれないというふうに言われていたのが非常に印象的だったんです。やっぱりそういうふうに思われるようになった契機というのは、九〇年代ぐらいの……

西里 そうそう、そのあたりから、それに関しては考えているのね。

石川 九五年の基地、少女暴行事件¹⁵。

西里 そうそう。

石川 あの一連の事件が、やっぱり大きかったということですかね。

西里 そうそう。

石川 ありがとうございます。あと一つ伺いたいんですが、こういう復帰の問題について論じられる際に、あまり先生のご論文には、アメリカについてどういうふうに考えておられかというの、あまり直接的には書かれていらつしやらないような気がするんですけれども、例えば、アメリカ統治、アメリカの支配というのは、今から振り返って、あるいは当時、どのように評価されていたんでしょうか。

西里 あれも複雑だからね。要するに、私的な個人的な側面から言うと、いわゆる基地で米人

を相手にして生計を立てていた家庭の事情から言うと、アメリカ軍は全部撤退すべきだというふうな議論にはなかなか同調しにくいという面が、ずっと学生時代を通して、それから六九年に帰ってくるまで、そういう葛藤を抱えていたということはあるんです。

石川 うーん、はい。

西里 ただ、問題を突き詰めていくと、どうしてもやっぱりアメリカの対応というか、アメリカの沖縄統治というものが根幹にあるんだという認識は、もうかなり、七〇年、七二年復帰前後から強くなってきたというわけで。反米というより、やっぱりね、今の状況を枠付けしている安保の問題、安保条約の問題、地位協定（日米地位協定）の問題とかね、思いやり予算、そういうものが改められない限り、沖縄の現状打開というのは極めて難しいんじゃないかと。

だからどうするかということになると、沖縄の内部の力だけで打破できるような問題ではないと。安保条約が日本全体を規定している枠組みである以上、それを何とかしなきゃいかんというふうな意識が非常に強いというのが今の段階ですね。

石川 はい、ありがとうございました。では、ほかの方に。

今西 ああ、どうぞ、もうあまり時間がないです。すから、どうぞ積極的に質問してください。

三木 すみません、簡単なことなんです。三木と申します。

京都大学へ入学された時に、留学生としてとおっしゃったんですが。

西里 そうそう。

三木 当時の、沖縄から本州側の大学へ入られるときは、何かそういう特殊な制度を使うという



参加者全員で。中央に西里氏、右が今西、その後ろが石川、最後列左が天野。

うかたちになつていたんですか。

西里 そうです。国費制度、自費制度というものがあつて。だから特別枠ですよ。京大の入学定員の特別枠で、僕らのころは年間四名ですね。医学部、工学部、私が文学部、理学部か。この四つの学部には一人ずつ配分されると。

三木 それは、ほかの大学も同じなんですか。

西里 だいたい同じですね。

三木 ああ、そうですか。

いまに・し・はじめ◎1948年生まれ。1979年、立命館大学大学院文学研究科修士課程修了。1990年、農学博士（京都大学）。1996・2001年、韓国忠南大学交換・客員教授。著書に『近代日本成り立ちの民衆運動』（柏書房）、『近代日本の差別と性文化』（雄山閣）、『メディア都市・京都の誕生』（同）、『文明開化と差別』（吉川弘文館）、『遊女の社会史』（有志舎）、『近代日本の地域社会』（日本経済評論社）ほか多数。

いしかわ・りょうた◎1974年生まれ。大阪大学文学部卒、同大学院文学研究科東洋史専攻修了。主な研究分野は朝鮮近代史、東アジア経済史。著書に『近代アジア市場と朝鮮：開港・華商・帝国』（名古屋大学出版会、2016年）があり、朝鮮半島を中心とした近代東アジアの国際商業・金融と華僑商人のネットワークについて検討した。

あまの・なおき◎1974年生まれ。上智大学外国語学部卒、北海道大学大学院文学研究科修了。北東アジア境界政治史、サハリン島地域研究。主な著書・論文に『樺太四〇年の歴史』（原暉之と共編、全国樺太連盟、2017年）、『田舎の「革命」：革命・内戦期サハリン島の地域構造』（『アリーナ』20号、2017年）などがある。

●インタビュー参加者

飯塚一幸（いづか・かずゆき）◎大阪大学大学院文学研究科教授
大濱郁子（おおはま・いくこ）◎琉球大学人文社会学部准教授
井潤 裕（いたに・ひろし）◎北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター共同研究員
塩出浩之（しおで・ひろゆき）◎京都大学大学院文学研究科教授
高岡 萌（たかおか・きざし）◎大阪大学大学院文学研究科博士課程
中村 平（なかむら・たいら）◎広島大学大学院文学研究科教授
広瀬玲子（ひろせ・れいこ）◎北海道情報大学情報メディア学部教授
三木理史（みき・まさふみ）◎奈良大学文学部教授
水谷清佳（みずたに・さやか）◎東京成徳大学国際学部准教授

西里 人数は違いますけれどもね、だいたい同じ。だから必ずいるんですよ、沖縄から来た学生というのが。返還運動なんかは彼らが核になるので。

三木 それは返還まで続いた制度ですか。

西里 そうですね。ずっとパスポートが必要でしたから。だから、ほかの国々、フィリピンとかベトナムとか、南ベトナムですけれども、これらの学生と一緒にミーティングをするという

ようなこともありましたね。

三木 ありがとうございます。

石川 永積安明氏の渡航拒否問題¹⁶、あれは先生が大学にいらつしやる以前、もうちょっと前ですか。

西里 あれはね、永積さんの問題は、そうだね、やつぱり五九年に私は大学へ入っているから、その直前か直後かな。

石川 ちょっとそれるんですね。

西里 あの事件は、この沖縄では相当大きな反発を引き起こしたということがありますね。

石川 そのせいで、やつぱりちよつとアメリカに盾突くといけないんじゃないかと、そういう脅しといえますか、恐怖感というようなものはあったんでしょうか。

西里 ありますよ、それは。僕ら、だって、いつパスポートを取り上げられるか分からないというね、何があるから。

石川 あ、その、本土から沖縄へ強制送還みたいな、そんなこともあり得た。

西里 強制送還というよりは、だから沖縄に帰れなくなるとか、いったん沖縄に帰ってから、再度日本へ渡航するときには、パスポートが下りなくなる。そういう恐怖感がずっと潜在的にありましたから。だから、あんまり運動の前面

に顔を出したくないということはありませんね。

今西 それではちよつと時間の都合がありますので、すみません、ここで打ち切らせていただいて、あと細かいことは食事会の時に聞いていただいたら結構だと思いますので。どうも、今日は本当にありがとうございます。

西里 ああ、いや、どうも。

石川 ありがとうございます。

(続く)

注

(1) 八重山列島の一島。石垣島より六キロメートル南に位置し、面積は五・四三平方キロメートル。石垣島以外の全島が沖縄県八重山郡竹富町に属する。

(2) 宮古列島(宮古群島)の一島。宮古島と石垣島の中間に位置し、面積は一九・七五平方キロメートル。水納島との二島で、沖縄県宮古郡多良間村を構成する。

(3) 八重山列島。琉球列島の南端に位置し、大小三十一の島々からなる島嶼。有人島は一一島で、石垣島(石垣市)、与那国島(与那国町)以外の九島は竹富町に属する。八重山列島と宮古列島を総称して「先島」とも呼ばれる。

(4) 日本書記の記述により、神武天皇即位の年(西暦紀元前六六〇年)を元年とする紀元を皇紀といい、一九四〇年は皇紀二六〇〇年に当たる。同年一月一〇日、宮城前広場において内閣主催の「紀元二千六百年式典」が開催された。

(5) 石灰岩の浸食によって形成される鍾乳洞などの自然洞窟を沖縄本島方言でガマと呼ぶ。沖縄戦では住民や日本兵の避難場所となった。また野戦病院としても利用され、ひめゆりの塔が建てられている沖縄陸軍病院第三外科壕跡もそのひとつである。

(6) スピットファイア。沖縄戦に投入されたのは、英海軍向けのスピットファイアでシーファイアと呼ばれる。

(7) 沖縄戦で使用された米海軍・海兵隊の代表的艦上戦闘機であるグラマン社製F6F「ヘルキャット」の別称。一九四四年一〇月一〇日、計一三九六機の米軍機が全五波にわたって南西諸島をはじめ襲った大空襲、いわゆる「一〇・一〇空襲」で使用されたことから、グラマンが米軍機の別称となった。

(8) 一九四五年五月九日、撃墜されて竹富島沖合で漂流していた英戦闘機パイロット(カメロン中尉)の名で呼ばれた)を捕虜とした。石垣島に連行されたが、その後の消息は不明である。

(9) 一九四四年九月から、当時人口約一〇〇〇人の竹富島の守備に当たった独立混成第四五旅団独立歩兵三〇一大隊第一中隊。隊長大石喬の名をとって通称大石隊。マラリアなどで九人の死者を出し、竹富島には「大石隊戦没者慰霊の塔」が建立されている。

(10) 沖縄戦末期、石垣島で撃墜されたグラマン機搭乗の将兵三人を惨殺し、日本兵が戦争犯罪に問われた事件。一九四五年四月一五日、日本海軍石垣島警備隊がグラマン機TBFアベンジャー一機を撃墜、搭乗者三名(テボ中尉、タグル兵曹、ロイド兵曹)が落下傘で降下したところを確保した。同日夜にテボ中尉、タグル兵曹は斬首、ロイド兵曹は四〇(五〇)人の兵士によって銃剣で刺殺された。当初事件にはかん口令が敷かれていたが、投書により発覚し、一九四七年一月に裁判が開始された。翌四八年三月に第一審判決が下され、被告四六人中四一人に死刑判決、そのうち七人の死刑が執行された。死刑宣告を受けたなかには沖縄県出身者も七人含まれていたが、いずれも後に減刑されている。二〇〇一年、石垣市唐人墓公園内に慰霊碑が建立された。

(11) 沖縄防衛第三軍司令官・牛島満中将、同参謀長・長勇が糸満市摩文仁の丘で自決した一九四五年六月二三日をもって一般には沖縄戦終結とされる。ただし、沖縄本島でも、第二四師団第三連隊は八月二七日まで投降降しておらず、また久米島に米軍が上陸したのは六月二六日で

- (1) あり、実質的には継続されていたともいえる。嘉手納の米第一〇軍司令部で南西諸島の全日本軍代表者が降伏文書を調印したのは九月七日のことである。
- (2) 『竹富町史(第二二巻)』によると、一九三八年時点で竹富島の人口一四七九人中、六五九人が出稼に出ており、そのうち八割が台湾への出稼であった。
- (3) 一九五〇年八月四日に公布された米国軍政府令第二二号「群島政府組織法」に基づき、沖縄群島・宮古群島・八重山群島・奄美群島を法人とし、米国軍政の指示に従って区域内の行政事務を担う群島政府が各法人に組織された。群島知事および群島議会は公選とされた。一九五二年四月一日の琉球政府発足にともない、群島政府は職務を琉球政府に移管して解消された。
- (4) 八重山群島知事選挙は、吉野高善(八重山民政府知事、民主党)と安里積千代(弁護士、自由党)が立候補して一九五〇年九月一七日に投票がおこなわれ、安里が当選した。琉球政府発足にともない、八重山群島政府は琉球政府八重山地方庁に移行した。
- (5) 米国統治下で全琉球列島を統括した沖縄住民側の中央政府。一九五二年四月一日、米国民政府布告第一三三三号「琉球政府の設立」に基づいて創立。立法(立法院)・行政(行政主席・司法(琉球上訴裁判所)の三機関を備えた自治機構。七二年の日本復帰まで存続した。
- (6) 安里積千代(あざと・つみちよ、一九〇三〜一九八六)沖縄県島尻郡座間味村生まれ。日本大学法科を卒業後、一九三〇年に東京で弁護士を開業。翌三一年に台湾へ渡り、三五年に台南市議。戦後沖縄に戻り、八重山群島知事をつとめた後、一九五二年琉球立法院議員に当選。沖縄社会大衆委員長などを経て、一九七〇年以来衆院議員に二選。七二年民社党に転じ、同党沖縄県連委員長となる。七六年には沖縄県知事選挙も立候補したが落選。社会大衆委員長時代に米軍用地問題の解決のために尽力、本土復帰と自治拡大を推進、六八年の革新政権の実現に大きく寄与した。
- (7) 前新透(まえあら・とおる、一九二四〜二〇一一)沖縄県竹富島生まれ。竹富町立船浦中学校校長、石垣市立大浜小学校校長などをつとめた。一九八五年に退職後、竹富方言の収集・研究をおこない、二〇一一年に『竹富方言辞典』(南山堂、全一五六二頁)を刊行し、同年第五九回菊池寛賞を受賞した。
- (8) 国費学生制度は、一九五三年四月、日本政府の援助により、公費琉球学生制度としてスタートし、後に国費沖縄学生制度と改称される。日本政府が学費を援助し、県内の選抜試験に合格すれば本土の国立大学に枠外定員として入学が許可された。当初の募集定員は五〇人だったが漸次増員され、六七年以降は一七〇人。医・歯学部入学者が全体の四割を占めたことが特徴的である。琉球大学医学部設置(一九七九年)にともない一九八〇年度限りで廃止された。一方、自費学生制度は一九五五年に開始され、学費援助がないだけで、選考・入学の方式は国費制度と同様である。同制度は一九七二年度で廃止。
- (9) 旧制沖縄県立第二中学校を前身とする県下有数の名門校。一九四七年一〇月、首里高等学校分校として開校。四八年二月に那覇高等学校として独立し、旧県立第二中学校跡地に校舎をかまえる。七二年五月の復帰にともない、琉球政府立から県立となる。
- (10) 西里喜行「私の歴史学研究四〇年(備忘録)」私家版、二〇〇六年。
- (11) 瀬長亀次郎(せなが・かめじろう、一九〇七〜二〇〇一)沖縄県島尻郡豊見城村(現・豊見城市)生まれ。旧制第七高等学校(現・鹿児島大学)に進学するも、社会主義運動への参加を理由に放校処分。中国に出征。戦後、名護町助役などを経て、一九四六年、うるま新報(現・琉球新報)社長に就任するも、沖縄人民党結成への参画に対する米軍の圧力を受けて辞任。五〇年に沖縄群島知事選挙に出馬するも落選。五二年、琉球立法院議員総選挙でトップ当選。五四年一〇月、沖縄から退去命令を受けた人民党員をかくまった容疑で米軍に逮捕され、懲役二年の実刑を受ける(人民党事件、通称・瀬長事件)。五六年四月に出獄し、同年一二月、那覇市長選挙に出馬し当選。五七年、米民政府高等弁務官布令一四三三号(通称・瀬長布令)に基づき、投獄経験のある瀬長は市長から追放、被選挙権を剥奪される(那覇市長問題)。六七年に同布令が廃止され被選挙権を回復。六八年の立法院議員選挙に当選する。七〇年、沖縄初の国政参加選挙で衆議院議員に当選。以降七選。日本共産党副委員長などを歴任。二〇一七年、ドキュメンタリー映画『米軍(アメリカ)が最も恐れた男 その名はカメジロー』(監督・佐古忠彦)が制作された。
- (12) 一九五六年五月のプライース勧告を契機とする沖縄全域での大衆運動。五四年四月に琉球立法院が決議した、軍用地料一括払い反対・適正補償・損害賠償・新規接収反対の「土地を守る四原則」に対し、米国下院軍事委員会特別分科委員会委員長メルヴィン・プライースは、一括払い・新規接収を勧告した。これに反対する軍用地所有者の土地闘争が、あらゆる組織・階層を巻き込み、米軍政全般に対する島ぐるみの抵抗運動に発展した。しかし、軍用地料引上げによる受益者とのあいだで運動に亀裂が生じ、軍用地料引上げと支払い方法の変更をもって五八年に運動はひとまず収束した。
- (13) 那覇市長問題。一九五七年のいわゆる瀬長布令により、投獄歴のある瀬長は市長職から追放、被選挙権も剥奪された。
- (14) 島ぐるみ闘争のこと。
- (15) 軍用地料一括払い反対・適正補償・損害賠償・新規接収反対の「土地を守る四原則」を固守する立場。
- (16) 一九五三年四月三日に公布された米国民政府令第一〇九号「土地収用令」により、土地所有者への収用告知後三〇日以内に返答がなければ土地所有者は米軍に帰属すること、緊急の必要があれば告知後ただちに明け渡し命令を発することが定められた。この強制収用手続きにより多くの新規接収がおこなわれた。五七年二月三日、米国民政府令第一六四号「米国合衆国土地収用令」の施行にともない、府令第一〇九号は廃止された。
- (17) 琉球列島米国高等弁務官府が沖縄住民へのPR用に発行した月刊誌。一九五九年一月創刊。沖縄の専門家をスタッフとして、沖縄の文化、米国の歴史などを紹介、約

一〇万部が配布された。日本復帰後『交流』と改題され、七三年六月まで発行された。

- (28) 一九四七年七月、瀬長亀次郎、兼次佐一らを中心に石川市で結成。四九年の党大会以降、米国統治への批判を強めていった。米国民政府は人民党を共產主義政党とみなし、人民党事件（瀬長事件、五四年）、那覇市長問題（五七年）などの弾圧を加えた。七三年に日本共産党と合流し、日本共産党沖縄県委員会となった。

- (29) 米軍統治下では都合七回、通貨制度の変更があった。一九四五年四月に米軍はいっさいの金銭取引を禁止した（無通貨時代）。四六年三月、B型円軍票紙幣（B円）・新発行日本銀行券・五円以上の証紙貼付旧日本銀行券・五円未満の旧日本銀行券および同硬貨の四種類が法定通貨に指定されたが、実際に発行されたのはB円のみだった（第一次通貨交換）。四六年八月、沖縄本島に限ってB円を回収して新日本円を発行（第二次通貨交換。四七年八月、B円が再度法定通貨に指定（第三次通貨交換修正）。四八年七月二日を期してB円を琉球列島唯一の法定通貨と定める（第三次通貨交換）。五八年九月一六・二〇日にB円と米ドルとの交換がおこなわれドル通貨制へ移行（第四次通貨交換）。七二年五月一五日の施政権返還にともないドル＝二〇五円でドル通貨が円と交換された（第五次通貨交換）。

- (30) 米軍が発行した円表示B型軍票の通称。一九四八年七月、日本円の不法流入によるインフレ防止対策として新日本円が排除されて以降、一〇年間沖縄唯一の法定通貨として使用。五〇年四月にドル＝二〇〇B円にレートが設定されて以後は固定相場制。五八年九月のドル通貨制移行により廃止。

- (31) 東恩納寛惇（ひがしおんな・かんじゅん、一九八二—一九六三）沖縄県那覇東町生まれ。第五高等学校、東京帝国大学文科大学史学科卒業。帝大在学中の一九〇九年に執筆した、吉田東伍編『大日本地名辞典』（富山房）の「続編第一 琉球」は琉球に関する初の本格的歴史地理書とされる。東京府立第一中学校教諭、東京府立高等学校教授などを歴任。その間、一九三三年に東京府在外研

究員として東南アジア・インドを歴訪。一九四九年、拓殖大学教授就任。『黎明期の海外交通史』（帝國教育出版部、一九四一年）など、その実証的沖縄史研究はいまも高く評価されている。琉球新報社編『東恩納寛惇全集』全二〇巻・別巻一（第一書房、一九七八・九三年）。

- (32) 一九五〇年五月二日、英語学部・教育学部など六学部で首里城跡に開学。四六年開設の高等教育機関、沖縄文教学校（教員養成・沖縄外国語学校（通訳・翻訳官養成）は吸収された。当初は米軍政府情報教育部の所管で、米軍の布告・布令によって管理運営がおこなわれたため「布令大学」と呼ばれた。琉球政府立法院制定の「琉球大学管理法」（六五年）により、六六年八月二日より琉球政府立大学となる。七二年の本土復帰にともない、国立大学に移管された。

- (33) 一九四九年五月の新制大学発足時に、京都大学宇治分校が設置され、教養課程の一部（一回生）がおかれた。一九六一年、吉田分校に統廃合される。

- (34) 井口和起（いぐち・かずき、一九四〇—）京都府生まれ。福知山公立大学学長、京都府立大学名誉教授。日本近代史。著書に、『朝鮮・中国と帝国日本』（岩波書店、一九九五年）など。

- (35) 松井芳郎（まつい・よしろう、一九四一—）京都府生まれ。名古屋大学名誉教授。国際法。著書に、『現代日本の国際関係』（勁草書房、一九七八）など。

- (36) 日本の新左翼党派の一つ。正称は共産主義者同盟。略称のブント（Bund・同盟）は、ドイツ語名 Kommunistische Bund に由来する。日本共産党を除名された学生党員らが一九五八年に結成。学生組織は社会主義学生同盟（社学同）。全日本学生自治会総連合（全学連）の主導権を握り、六〇年の安保闘争を主導したが、闘争後に分裂、解体。革命的共産主義者同盟（革共同）全国委員会、日本赤軍の母体となった赤軍派、浅間山荘事件を起こした連合赤軍などが派生的に誕生した。

- (37) 渥美文夫（あつみ・ふみお、一九四〇—）大阪府生まれ。朝鮮問題研究者、元予備校講師。著書に、『金日成・金正日体制と東アジア』（現代企画室、二〇〇七年）な

ど。

- (38) 北小路敏（きたこうじ・さとし、一九三六—二〇一〇）京都府生まれ。社会運動家。京大入学後、ブントに加入し、京都大学細胞長。全学連書記長として、六〇年六月一日、安保闘争における国会突入を指揮したとして逮捕。ブント解体後、革共同中核派を結成し、最高幹部。

- (39) 一九四八年、大学理事会法案と授業料値上げ反対の全国的授業放棄運動を契機に、大学生自治会の全国的連合組織として結成。六〇年安保闘争における大量動員・実力行使によって学生運動の代名詞的存在となるが、闘争後に分裂・弱体化する。

- (40) 一九五九〜六〇年に展開された、日米安全保障条約の改定に反対する闘争。六〇年五月の自民党による強行採決後に全国的な運動に展開。国会包囲デモは最大で三万人規模に達した。六月一日、国会構内で警官隊と衝突し、東大生の樺美智子が死亡した。七月一九日に新安保条約は自然承認され、翌二〇日、岸信介内閣は退陣した。

- (41) 芝原拓自（しばら・たくじ、一九三五—）大分県生まれ。大阪大学名誉教授。日本近代史。著書に、『明治維新の権力基盤』（御茶の水書房、一九六五年）など。

- (42) 鈴木良（すずき・りょう、一九三四—二〇一五）神奈川県生まれ。立命館大学教授、部落問題研究所理事を歴任。日本近代史、部落問題研究。著書に、『近代日本部落問題研究序説』（兵庫部落問題研究所、一九八五年）など。

- (43) 安丸良夫（やすまる・よしお、一九三四—二〇一六）富山県生まれ。一橋大学名誉教授。日本近代史、宗教思想史。著書に、『日本の近代化と民衆思想』（青木書店、一九七四年、後に平凡社ライブラリー）など。

- (44) 原秀三郎（はら・ひでさぶろう、一九三四—）静岡県生まれ。静岡大学名誉教授。日本古代史。著書に、『日本古代国家史研究』（東京大学出版会、一九八〇年）など。

- (45) 広川禎秀（ひろかわ・ただひで、一九四一—）大阪市立大学名誉教授。日本近現代史。著書に、『恒藤恭の思想的探究』（大月書店、二〇〇四年）など。

- (46) 都出比呂志（ついで・ひろし、一九三七—）大阪府生まれ。大阪大学名誉教授。考古学。著書に、『前方後円墳

- (46) と社会」(塙書房、二〇〇五年) など。
- (47) 狭間直樹(はざま・なおき、一九三七) 兵庫県生まれ。京都大学名誉教授。中国近現代史。著書に、『梁啓超東アジア文明史の転換』(岩波現代全書、二〇一六年) など。
- (48) 佐竹靖彦(さたけ・やすひこ、一九三九) 大阪府生まれ。京都立大学名誉教授。中国史。著書に、『唐宋変革の地域的研究』(同朋舎出版、一九〇〇年) など。
- (49) 藤田敬一(ふじた・けいいち、一九三九) 京都府生まれ。元岐阜大学教授。中国近代史、部落問題研究。著書に、『同和はこわい考』(あうん双書、一九八七年) など。
- (50) 森正夫(もり・まさお、一九三五) 京都府生まれ。名古屋大学名誉教授。中国明清史。著書に、『森正夫明清史論集(全三巻)』(汲古書院、二〇〇六年) など。
- (51) 琉球列島の日本への復帰・帰属を求める運動は、初期の段階では日本復帰運動(日本復帰論)という名称がよく使われ、祖国復帰運動(祖国復帰論)という名称がより多く使われるようになるのは一九六〇年代以降である。本土側からこれに呼応するのが沖縄返還運動である。
- (52) 正式名称は沖縄諸島日本復帰期成会。一九四六年、沖縄の日本復帰を要求して東京在住の沖縄県人によって組織された運動体。代表は、ジャーナリストで後に首里市長もつとめた仲吉良光。沖縄の日本復帰を求めた陳情書をマッカーサーに提出するなどの運動を展開した。七四年三月、仲吉の死去とともに組織も消滅した。
- (53) 正式名称は琉球日本復帰促進期成会。一九五一年四月二九日、沖縄社会大衆党と沖縄人民党が提唱し、教職員会・青年会・婦人会などで組織された超党派の復帰運動体。会長は兼次佐一。五年一月に沖縄青年連合会を主体に結成された日本復帰促進青年同志会とともに全琉球列島で署名運動を展開し、二〇歳以上の有権者の七割を超える一九九〇〇〇人の署名を集めて吉田茂首相らに日本復帰を要請した。陳情後、会は自然消滅した。
- (54) 一九六三年以降毎年四月二八日は、米施政下の沖縄と日本の「国境」であった北緯二七度線の海上で、本土側代表団と沖縄側代表団でおこなわれた交歓集会。
- (55) 祖国復帰運動の中心母体で、一九六〇年四月二八日に結成大会。米軍の沖縄支配を合法化したサンフランシスコ講和条約が発効した四月二八日を「屈辱の日」ととらえ、この日を中心に復帰運動をおこなうようになった。沖縄教職員会・沖縄県青年団協議会(沖縄協・沖縄官公庁労働組合協議会(官公労)が世話役団体となって結成され、沖縄自民党は参加しなかったが、革新三政党(沖縄社会大衆党・沖縄人民党・沖縄社会党)、PTA連合会、遺族連合会などを含む幅広い組織を構成した。復帰後の七七年五月一日に解散。
- (56) 大江健三郎(おおえ・けんざぶろう、一九三五) 愛媛県生まれ。作家。一九六九年にエッセイ『沖縄ノート』(岩波新書)を発表した。一九九四年、ノーベル文学賞受賞。
- (57) 中野好夫(なかの・よしお、一九〇三―一九八五) 兵庫県生まれ。英文学者。東京大学、中央大学教授を歴任。六〇年、沖縄関係の資料収集・閲覧を目的とした沖縄資料センターを設立。七二年の閉鎖に際して、法政大学沖縄文化研究所に資料を寄贈した。沖縄関連の著作に、戦前最後の沖縄県知事島田穀を描いた『最後の沖縄県知事』(文藝春秋社、一九六一年) など。島田は、旧制第三高等学校野球部で中野の一年先輩にあたる。
- (58) 池上惇(いけがみ・じゅん、一九三三) 大阪府生まれ。京都大学名誉教授。福井県立大学名誉教授。財政学。著書に、『現代資本主義財政論』(有斐閣、一九七四年) など。
- (59) 尾崎芳治(おさき・よしはる、一九三三―二〇一七) 京都府生まれ。京都大学名誉教授。経済思想史。著書に、『経済学と歴史変革』(青木書店、一九九〇年) など。
- (60) 宮崎市定(みやざき・いちさだ、一九〇一―一九九五) 長野県生まれ。京都大学名誉教授。日本を代表する東洋史学者。『宮崎市定全集(全二四巻・別巻一)』(岩波書店、一九九一―一九九四年)。
- (61) 宮崎市定『雍正帝』(岩波新書、一九五〇年、後に中公文庫)。
- (62) 一九五〇年、民主主義科学者協会京都支部歴史部会として発足。会誌『新しい歴史学のために』を発行。歴史科学協議会の地域組織として常任委員・全国委員を派遣している。
- (63) 中村哲(なかむら・さとる、一九三一) 愛知県生まれ。京都大学、福井大学、鹿児島国際大学名誉教授。経済史。著書に、『明治維新の基礎構造』(未来社、一九六八年) など。
- (64) 渡辺信一郎(わたなべ・しんいちろう、一九四九) 京都府生まれ。京都府立大学名誉教授。中国古史。著書に、『中国古代国家の思想構造』(校倉書房、一九九四年) など。
- (65) 足立啓三(あだち・けいじ、一九四八) 兵庫県生まれ。熊本大学名誉教授。中国史。著書に、『専制国家史論』(柏書房、一九九八年、後にちくま学芸文庫) など。
- (66) 島居一康(しますえ・かずやす、一九四二) 大阪府生まれ。大阪府立大学名誉教授。中国史。著書に、『宋代財政構造の研究』(汲古書院、二〇一二年) など。
- (67) 吉田滋一(よしだ・こういち、一九四六) 岐阜県生まれ。静岡大学名誉教授。中国史。著書に、『中国専制国家と家族・社会意識』(文理閣、二〇一二年) など。
- (68) 象徴的な東京大学、日本大学をはじめ一九六八年の大学紛争は東京を中心に展開されたが、京都大学でも医学部登録医制度への反対闘争に端を発し、三月から六月まで全学闘争委員会によるストライキがおこなわれ、研修医・学生五名の逮捕者も出ている。さらに翌六九年一月の学生部建物封鎖を契機に、京大紛争はより本格化するが、同年中に沈静化した。
- (69) 里井彦七郎(さとい・ひこしちろう、一九一七―一九七四) 大阪府生まれ。元東京都立大学教授。里井の義和団事件研究については、里井彦七郎『近代中国における民衆運動とその思想』(東京大学出版会、一九七二年) を参照。
- (70) 小野信爾(おの・しんじ、一九三〇) 大分県生まれ。花園大学名誉教授。中国近代史。著書に、『五四運動在日本』(汲古書院、二〇〇三年) など。
- (71) 小野和子(おの・かずこ、一九三三) 大阪府生まれ。

京都大学人文科学研究所名誉教授。近代中国女性史。著書に、『中国女性史』（平凡社選書、一九七八年）など。同書は、このインタビューの後に出版された。小野和子ほか編『京大生小野君の占領期獄中日記』（京都大学学術出版会、二〇一八年）。

(73) 佐伯富（さえき・とみ、一九一〇―二〇〇六）香川県生まれ。京都大学名誉教授。中国近世史。著書に、『清代塩政の研究』（東洋史研究会、一九五六年）など。

(74) 小野川秀美（おのがわ・ひでみ、一九〇九―一九八〇）高知県生まれ。京都大学名誉教授。中国近代史。著書に、『清末政治思想史研究』（東洋史研究会、一九六〇年、後に平凡社東洋文庫）。

(75) 西里喜行「清末の寧波商人について（上）（下）——『浙江財閥』の成立に関する一考察」（『東洋史研究』第一六巻第一―二号、一九六七年）。

(76) 遠山茂樹（とやま・しげき、一九一四―二〇一一）東京生まれ。専門は日本近代史。横浜市立大学、専修大学教授を歴任。今井清一・藤原彰との共著『昭和史』（岩波新書、一九五五年）は、作家亀井勝一郎らとのあいだでのいわゆる「昭和史論争」を巻き起こした。著書に『明治維新』（岩波全書、一九五一年、後に岩波文庫）など。

(77) 西里自身による遠山・芝原論争への言及は以下を参照。西里喜行「東アジア世界史研究の視点・方法・論点——諸説の検討」（『琉球大学教育学部紀要』第一部（二七）、一九八四年）。

(78) 蒋介石（じょう・かいせき、一八八七―一九七五）中国・奉化県（現浙江省寧波市奉化区）生まれ。日本留学後、孫文の革命運動に加わり、中国国民党の軍事指導者として頭角を現す。抗日戦に勝利後、中華民国憲法を制定して総統に選出されたが共産党との内戦に敗れて一九四九年に台湾に逃れた。七五年に総統のまま死去。

(79) アヘン戦争以前の中国では、広東の外国商館・船などに必需品を供給する商人を指したが、中国開港以後は、欧米商社のために中国国内での商取引を請け負って手数料を得る中国人商人を指すようになった。欧米資本が中国

企業に投下されるようになると、その企業の経営を請け負い、さらに自身も投資をおこなった商人を買弁資本と呼ぶ。

(80) 一九五〇年代以降、文化大革命期にかけて中国の経済史家のあいだで巻き起こった政治的品格をもつ論争で、賃労働関係の拡大を重要な指標として、資本主義の萌芽が明清期（一三八八―一九一一年）の特定の部門に出現していたかどうかを争点とした。

(81) 一九五一年九月のサンフランシスコ講和会議に向けて沖縄の地位について交わされた論議。占領初期の沖縄では日本復帰を唱えることは一種のタブーであった。しかし、五〇年一月二四日に米国が公表した対日講和七原則で、「琉球及び小笠原諸島の国際連合信託統治に同意」することがたわれたことから、沖縄の将来的帰属に関する議論が活発化した。社会大衆党（社大党）・人民党が日本復帰を明確に主張したのに対し、共和党は沖縄独立論を、社会党は信託統治論を唱えるなど意見は対立した。沖縄群島協議会は五年三月一九日に日本復帰要請決議を採択し、この決議を受けて、社大党・人民党が中心となって組織されたのが日本復帰促進期成会。

(82) 琉球王府の外交文書・文案を集成したもの。一四二四―一八六七年までの对中国、朝鮮、南方諸国との往復文書が収録された中近世外交史の根本史料。廃藩置県後、首里城保管の宝案は内務省に移管されたが、関東大震災で焼失。一方、久米村に保管されていた宝案は一九三三年島袋全発らの尽力で沖縄県立図書館に移管されたが、沖縄戦で散逸した。現存する諸本は、三三年に撮影された青写版の鎌倉芳太郎本、東恩納寛博本、三四―三五年に筆写本として作成された副本、台北帝国大学助教時代の小葉田淳らが三六―三九に作成した台湾大学本、東京大学史料編纂所が県立図書館に委託して四一年に作成した東大史料編纂所本などがある。八九年に現存する全篇を一冊の校訂本・訳注本として刊行する事業がスタートし、二〇一七年までに全一五冊の校訂本が沖縄県教育委員会より刊行された。

(83) 小葉田淳（こばた・あつし、一九〇五―二〇〇二）福岡県生まれ。専門は日本経済史。京都帝国大学文学部史学科卒業後、台北帝国大学講師、同助教授、敗戦後も国立台湾大学副教授として流用され四六年末に帰国。京都大学教授などを歴任。著書に『中世南島通交貿易史の研究』（一九三九年、日本評論社）、『日本鉱山史の研究』（岩波書店、一九六八年）など。

(84) 一九二八年三月二六日、日本領時代の台湾に設立された帝国大学。帝国大学としては七番目の創設。ただし、文部省ではなく台湾総督府が管轄した。敗戦後、四五年一月一日に中華民国が接収、国立台湾大学と改称して現在に至る。

(85) 原本を写真撮影し、その写真を原版として印刷した複製本。

(86) 金城正篤（きんじょう・せいとく、一九三五―）沖縄県糸満市生まれ。専門は沖縄近代史。千葉大学卒業後、京都大学大学院に進学。六七年、琉球大学法文学部講師、後に教授。『歴代宝案』編集委員会委員長もつとめた。著書に『琉球処分論』（沖縄タイムス社、一九七八年）など。

(87) 一九六五年一月五日、沖縄の歴史研究、文化発展への寄与を目的に結成。会長宮里栄輝。結成当初の会員は四〇人。会誌『沖縄歴史研究』は二一（七四年六月刊）まで発行。史料文献の復刻など、沖縄史研究における先駆的活動を進めた。

(88) 一九七〇年、沖縄歴史研究会編・刊行。同会所属の若手研究者らによる論文集。西里は「沖縄近代史における本島と先島——差別的構造と克服主体の形成」を寄稿している。

(89) 一九六五―七七年にかけて、琉球政府および沖縄県教育委員会によって刊行された歴史書。六七年からは沖縄史料編纂所が編纂にあたった。通常の都道府県史とは異なり、史料の存在状況を反映して近代史に限定されていることが特徴である。通史編・各論編・資料編・別巻の全二四巻からなる。

(90) 一九六六―二〇〇八年にかけて那覇市が刊行した歴史書。全三二巻・別巻一。六一年、那覇市市制四〇周年の

記念事業として編集が開始された。基本資料の刊行に注力し、『沖繩県史』とともに、六〇〜七〇年代の沖繩近代史研究の進展に大きな役割を果たした。

(91) 「琉球諸島に関する日本国とアメリカ合衆国との間の協定」(沖繩返還協定、一九七一年六月一七日調印)に基づき、七二年五月一五日、沖繩は日本に復帰した。なお、敗戦後同じく米軍の施政下におかれた奄美群島は五三年

二月二十五日、小笠原諸島は六八年六月二六日に日本復帰を果たしている。

(92) 新川明(あらかわ・あきら、一九三一〜)沖繩県生まれ。ジャーナリスト、思想家、詩人。琉球大学文学部国文科中退後、沖繩タイムスに入社、八重山支局長、取締役編集局長、社長、会長を歴任。『沖繩大百科事典』(沖繩タイムス社、一九八三年)刊行事務局長もつとめる。琉球民族独立総合研究学会(二〇一三年五月一五日発足)発起人。著書に、『新南島風土記』毎日出版文化賞受賞、大和書房、一九七八年、後に岩波現代文庫など。

(93) 安良城盛昭(あらかき・もりあき、一九二七〜一九九三)東京都生まれ。歴史学者。両親は沖繩県出身。第一高等学校、東京大学経済学部卒業。雑誌『歴史学研究』に掲載された太閤検地に関する卒業論文で、『安良城旋風』を学界に巻き起こし、その時代区分論は、『安良城理論』と呼ばれた。東京大学社会科学部研究所教授を七二年に辞職し、沖繩大学教授に就任、後に学長。八〇年より大阪府立大学教授(後、同名誉教授)。著書に、『幕藩体制社会の成立と構造』(御茶の水書房、一九五九年)など。旧慣温存期の歴史評価をめぐる安良城盛昭と西里喜行の論争。旧慣温存期とは、一八七九年の薩摩置県後、一八九九〜一九〇三年の土地整理に至る時期の明治政府の対沖繩政策を特徴づける用語。論争は、一九七七年八月から七八年一〇月にかけて『沖繩タイムス』紙上で前後四回にわたって展開された。『旧慣温存期』を沖繩における植民地的搾取としてとらえる西里と、松方デフレの被害を回避できたとする安良城との間の論争は、日本本土の沖繩支配の性格にまで及んだ。論争は決着をみないま

ま、新聞社の都合で打ち切られた。論争の全容については以下を参照。安良城盛昭『新・沖繩史論』(沖繩タイムス社、一九八〇年)、西里喜行『沖繩近代史研究』(沖繩時事出版、一九八一年)。

(95) 沖繩が日本国から受けてきた抑圧の歴史への反発、独自の文化圏をもつという民族的自覚に立脚して、日本国の版図から離脱して独自の主権国家であるべきだとする主張。復帰思想と相対立する。一九四〇〜五〇年代に沖繩でも本土でも顕在化し、仲宗根源和と『琉球独立論』(五一年)や、日本共産党の『沖繩民族の独立を祝ふ』(メッセージ(四六年))に代表される。復帰直前にも、『琉球独立党』(七一年)を結成した崎間敏勝や、民間団体「琉球義会」らを代表的な担い手としたが、復帰運動の熱狂の前に独立論は姿を消した。八〇年代以降も、沖繩の自立を模索する思想運動として一定の水脈を保ち、二〇一三年には、松島泰勝(龍谷大学教授)らを中心に琉球民族独立総合研究学会が結成されている。

(96) 一六〇九年、島津が琉球を侵略した事件。薩摩藩主島津家久は、領地拡大・対明貿易・琉球領有による薩摩藩の権力強化を企図して琉球出兵を計画、琉球を介した日明国交回復を懸案としていた徳川家康の許可を得た。一六〇九年三月、三〇〇〇人からなる薩摩軍は沖繩本島に上陸し、四月一日に首里城攻略、琉球国王尚寧らを捕虜にして五月二二日に帰陣した。尚寧は二年後に琉球に帰国し、日明国交回復に乗り出すが、中国側の拒否にあう。家康は、朝貢国家としての琉球王国に中国への窓口としての役割を期待した。その間、薩摩藩は琉球の検地をおこない、与謝島以北の奄美地方を分割して直轄領とし、その他の領域については琉球王国領としながらも、薩摩藩が管轄権を確保するものとした。その結果、独立国家だった琉球王国は薩摩藩を介して幕藩体制に組み込まれた。

(97) 明治政府のもとで、琉球が日本国に強制的に組み込まれた一連の政治過程。一八七二年九月、明治政府は琉球王国を琉球藩とし外務省の直轄とした。続いて琉球藩を廃して沖繩県を設置しようとしたが、琉球側の抵抗と、琉

球に対する宗主権を主張する清朝中国の抗議にあい、容易には進まなかった。七四年、明治政府は、台湾に漂着した琉球人が殺害されたことへの報復を名目として台湾に出兵し、琉球が日本の版図であることを中国に示した。七五年以降、内務官僚松田道之が処分官として琉球に再三派遣され、最終的には軍隊・警察によって地元土族層の反対運動を抑えて、七九年三月二七日、琉球藩廃止、沖繩県設置の廃藩置県を通告した。首里城は明け渡され、ここに琉球王国は滅びた。

(98) 新川明・川満信(ら)に代表される思想。一九六九年一月の「佐藤・ニクソン共同声明」で合意された沖繩返還に対し、日本・日本人に対して沖繩がもつ異質感・差意識を、日本国家を相対化するものとして肯定的にとらえ、日本国家への合一化としての復帰拒否を主張した。戦後はじめて沖繩が参加した七〇年一月二五日の国政選挙に際しては、広範な参加拒否運動を展開した。

(99) 沖繩本島に対して、宮古列島・八重山列島をあわせて先島(両先島)と呼ぶ。近世以降に用いられた呼称で、奄美地方を「道の島」と称したのに対応した用法とされる。『近代沖繩の歴史と民衆』所収の論文「沖繩近代史における本島と先島——差別の構造と克服主体の形成」で西里喜行は本島と先島のあいだに存在する構造的差別を論じている。

(100) 笹森儀助(ささもり・ぎすけ、一八四五〜一九一五)弘前藩士の子に生まれる。探検家、政治家。一八九三年五月〜一月の半年間沖繩を調査し、旅行記『南島探検』(一八九四年)を発表。先島での貧困とマラリアに苦悩する人びとの暮らしなど、そのリアルな観察眼によって書かれた同書は、南島研究の先駆けとして名高い。探検後は奄美王島の島司もつとめた。千島列島、朝鮮、シベリア調査でも有名。晩年には青森市長もつとめた。

(101) 琉球王国が宮古・八重山の農民に対して、年齢別に課していた頭割りの税制が人頭税である。本島と先島の構造的差別の要因であり、先島の農民に貧困をもたらしていた。一八八四年に製糖指導員として宮古に赴任した城間正安が、人頭税による収奪に苦しみ農民をみて、そ

の廃止を島役所・沖縄県当局に訴えたのが運動のはじまり。特権を脅かされる土族の抵抗にあいながらも、城間や宮古農民代表らの働きかけで中央政界でも問題がとりあげられ、九四年一月に帝国議会で、沖縄県宮古島島費軽減及島政改革請願書が可決された。一九〇三年一月、地租条例の交付により先島における人頭税は廃止された。

102 山里永吉(やまと・えいきち、一九〇二～一九八九) 沖縄県那覇生まれ。画家、作家、歴史家。日本美術学校を中退し、敗戦後には琉球政府立博物館長をつとめた。六九年、崎間敏勝らと「沖縄人の沖縄をつくる会」を結成し、「日本は祖国に非ず」として、琉球王府に夢を託した琉球独立論を主張。戯曲『首里城明渡し』など。

103 米国の苦力貿易船口バート・パウソン号が一八五二年、石垣島に漂着し、中国人苦力が上陸した国際的事件。五二年二月、中国人苦力四一〇人を乗せた同船は厦門(アモイ)からカリフォルニアに出向したが、琉球近海で苦力が暴動を起こし船長らを殺害。二月九日、船は石垣島沖合で座礁し、中国人三八〇人、米人一人が上陸した。英米艦船が二度にわたって石垣島に上陸し八〇人の苦力を逮捕した。五三年九月二九日、琉球の護送船二隻で一七二人を石垣島から福州に護送した。石垣島滞在中、自殺・餓死・被弾などで二八人の苦力が死亡した。一九七一年、石垣市観音崎に唐人墓が建立された。事件に関する西里の研究は、『パウソン号の苦力反乱と琉球王国』(榕樹書林、二〇〇一年)にまとめられている。

104 伊波普猷(いは・ふゆう、一八七六～一九四七) 琉球藩那覇西村生まれ。沖縄研究の創始者。第三高等学校、東京帝国大学文学科言語学専修を卒業。在学中から『おもろそつし』研究を基礎とした沖縄研究に取り組む。大学卒業後、沖縄に帰郷。沖縄県立図書館長をつめながら、言語学・民俗学・歴史学・宗教学・人類学など幅広い視点から沖縄郷土研究・啓蒙活動に打ち込む。沖縄人の人間としての尊厳を回復する根拠として『日流同祖論』を主張した。二五年に上京、柳田国男・折口信夫・河上肇らと交流をもちながら、在野の学者として沖縄研究に

専念する。著書に『古琉球』(沖縄公論社、一九二一年、後に岩波文庫)、『校訂おもろそつし』(南島談話会、一九二五年)など。『伊波普猷全集(全一二巻)』(平凡社、一九七四～七六年)。

105 喜舎場朝賢『琉球見聞録』(一九一四年)の序文に伊波普猷が「琉球処分は一種の奴隸解放也」と記し、その後も伊波はこの発言を複数の自著のなかで繰り返す。琉球処分認識に大きな影響を与えた。

106 琉球王府に保管されていた一六六〇年代から一八七〇年代までの文書群。対中国関係、対薩摩藩関係文書や、異国船来航関係日記、中国人・朝鮮人等の漂着民保護関係文書、琉球国内向けの「廻文」など多様な文書類から構成される。廃藩置県後、明治政府が接収したが、関東大震災や戦災により散逸し、現存するのは二四件一三三冊である。原本は、東京大学法学部法制資料室と国立公文書館に所蔵。一九八八年に浦添市が編集刊行を開始し、二〇〇二年に全一九巻が完成した。

107 村井章介(むらい・しやうすけ、一九四九～) 大阪府生まれ。立正大学教授、東京大学名誉教授。著書に、『世界史のなかの戦国日本』(ちくま学芸文庫、二〇一二年)など。また、琉球史関連の共著書に、村井章介・三谷博編『琉球からみた世界史』(山川出版社、二〇一二年)がある。

108 一九三三年創刊。東京帝国大学文学部史学科出身者を中心として三二年に設立された学会「歴史学研究会(略称・歴研)」が発行する学術雑誌。

109 宮古・八重山分島問題とも。日本政府による沖縄の廃藩置県に反対する清朝中国が米国外前大統領グラントに調停を依頼し、グラントの仲介により開始された日清交渉で、日本側は、中国国内で欧米並みの通商権を認める代わりに宮古・八重山を中国に引き渡すことを提案した。「分島・増約案」と呼ばれる。中国側はこれを受け入れ、八一年二月の宮古・八重山引き渡しで妥結するが、在清琉球人の強力な調印阻止運動によって、正式調印されることなく棚上げにされた。

110 井上勝生『幕末・維新(シリーズ日本近現代史①)』(岩

波新書、二〇〇六年)。井上勝生は一九四五年生まれの日本史家で、北海道大学名誉教授。

111 八重山出身者をエーマンチュ(八重山人)、宮古島出身者をメーキンチュ(宮古人、ナークンチュとも)と呼ぶ沖縄本島方言。

112 西里喜行「祖国復帰運動史の総括と教訓——沖縄における七〇年代闘争の展望のために」『歴史評論』第二三八号、一九七〇年、同「沖縄における「反復帰論」とその周辺」『民主文学』第七〇号、一九七一年。

113 沖縄歴史研究会「沖縄史研究の課題と方法」『歴史評論』第三〇〇号、一九七五年。

114 西里喜行「琉球・沖縄史における「自治問題」『環』第三〇号、二〇〇七年。

115 一九九五年九月四日、沖縄キャンプ・ハンセンに駐留するアメリカ海兵隊員二人とアメリカ海軍軍人一人の計三人が、一二歳の女子小学生を拉致した上、集団強姦した強姦致傷および逮捕監禁事件。

116 一九六四年、国文学者の永積安明神戸大学教授が琉球大学の招へい教授として来沖するのを米国民政府が入域拒否した事件。これに反対した琉球大学国文科の学生を中心とする招請実現署名運動に端を発し、渡航制限撤廃を求める運動が沖縄内外で起こった。同年二月、永積の渡航は許可された。

117 ここでいうパスポートとは、日本国外務省が発券する旅券ではなく米国民政府が発行するヴィザ(査証)のこと。ただし当時の沖縄人も日本国外に出国する場合は、日本国外務省発行のパスポート(旅券)を携行した。